



公益社団法人日本環境教育フォーラム 清里ミーティング2018(通算32回目)

「ESD + SDGs ～ 未来を変える教育を考える」

報告書

日 時：2018年11月16日(金)～18日(日)

会 場：公益財団法人キープ協会清泉寮

山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

主 催：公益社団法人日本環境教育フォーラム

後 援：環境省、文部科学省、林野庁、山梨県、ESD 活動支援センター、
持続可能な開発のための教育推進会議、日本環境教育学会

協 賛：アサヒグループホールディングス株式会社

公益財団法人セディア財団

損害保険ジャパン日本興亜株式会社

公益財団法人損保ジャパン日本興亜環境財団

損保ジャパン日本興亜保険サービス株式会社

J-POWER(電源開発株式会社)

株式会社日能研

参加者：146 名

目 次

開催趣意	1
スケジュール	2
開会式・えんたくんミーティング	6
全体会	7
全体会 1「SDGs がもたらした共創の可能性」	7
全体会 2「パートナーシップで未来を変える！」	12
全体会 3「アイデアは地球を変える」	18
参加者企画ワークショップ	19
体験型ワークショップ・①（90 分）	19
対話型ワークショップ（150 分）	22
体験型ワークショップ・②（90 分）	31
早朝ワークショップ（60 分）	36
当日募集ワークショップ（90 分）	37
ポスターセッション	40
閉会式	41
オプション	42
各コーナー	42
参加者データ	43
スタッフ・ボランティア	44
清里ミーティングこれまでの実績	45

清里ミーティングは、1987年9月、自然体験・野外教育・環境教育に関心を寄せる人たちが山梨県清里に集まり「第1回清里フォーラム」を開いたことからスタートし、2016年に通算30回目の開催を迎えた。学校、企業、NPO、家庭などで、持続可能な社会に貢献するひとづくり（未来を変える教育）に関わる方が学び合う場として、これまで5,000人以上の方が世代や地域を越えてつながり、全国にネットワークを広げている。

2018年は32回目の開催として、11月16日（金）～18日（日）の3日間にわたり、公益財団法人キープ協会 清泉寮・山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンターを会場に開催した。

本年より、開催をこれまでの土曜～月曜から、金曜～日曜の開催曜日を変更した。

■ 清里ミーティングの目的

1. 最先端の情報や手法を学ぶ場を提供し、参加者の活動をエンパワメントする
2. 参加者同士のネットワークを構築し、協働を促進する
3. 1、2をもって持続可能な社会に向けて行動する人を増やす

2015年に国連で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）に向け、環境教育だけではなく、他分野とのパートナーシップがより重要となってくる。清里ミーティングも環境教育以外のより広い分野からの参加者を募り、新しいコラボレーションが生まれることをねらっている。そのため、ミーティングの目的を環境教育に限らず、“持続可能な社会に貢献するひとづくりを目指した「学び合いの場」”とし、お互いの活動を理解し、認め合い、共に考え、力を合わせていける場の基盤づくりを目的とすることに変更した。

■ 清里ミーティングの特徴

清里ミーティングの最大の特徴は、参加者が“主役”であること。

どのようなことについて話し合い、共有し合うのか、参加者主体でつくり上げていくという性格を持つ。主催側で企画したプログラムのほかに、参加者の中からプログラムを企画・実施する方を募って開催している。

■ 今年の特徴

私たちは社会の中で生きている。そして、その社会は自然環境の中でしか存在できない。すべての生命を支える自然環境を、人間の好き勝手にバランスを崩してはいけないう。環境教育の大切なメッセージを胸に、私たちは活動を続けてきた。しかし現在、私たちは社会のバランスすら保つことが難しくなっている。貧困、差別、紛争、多くの社会課題によって、人々の目が外層の「環境」にまで向きにくい現状がある。では、現状を理解したうえで、前に進んでいくために何が必要なのか。

2018年は「ESD+SDGs ～ 未来を変える教育を考える」と題し、持続可能な社会の実現に向けたひとづくり（＝未来を変える教育）にスポットを当てた。環境教育がこれまで取組んできた「持続可能な開発のための教育（ESD）」とSDGsの接続は、その問いの重要なキーの1つ。学校教育・環境教育・社員教育・家庭教育など、様々な“教育”の先には、SDGsの達成につながる要素がある。

他者と「競争」するのではなく、多様なステークホルダーと「共創」できる人材を生み出す教育のヒントを探る3日間となった。

また、清里ミーティングが「平成30年度持続可能な社会づくり活動表彰」（主催：公益社団法人環境生活文化機構）にて環境大臣賞を受賞したことを開催中に参加者へ報告した。

【 1 日 目 】 11 月 16 日 (金)

時間	内容	会場
10:30～	受付開始	新館フロント前
11:00～11:30	ちょっと早めに到着された方のための先取り交流企画 (自由参加)	
13:00～13:30	開会式	新館ホール
13:30～14:15	えんたくんミーティング	
14:15～14:30	移動	
14:30～16:00	体験型ワークショップ・1	
	① SDGs に果たす ESD の役割	新館ホール
	② 自然観察で知る生物多様性、命のあり方、人という生物	本館ホール
	③ 学生版清里ミーティング実施に向けた作戦会議	アンデレホール
	④ 棚田米を土鍋で炊いて、味わい、お米の魅力を探る	特別展示ホール
	⑤ JOLA ～アウトドアで「未来のための人づくり」～	新館ホール
16:00～17:00	休憩・チェックイン	
17:00～18:30	●全体会・1 「SDGs がもたらす共創の可能性」 新しい分野や人をつなぐハブのような役割として、SDGs をベースに新たな協働プロセスを生み出し続けている 3 名をゲストに招きます。SDGs に向けて「今起きていること」と「これから起こそうとしていること」について、ご紹介いただきます。 環境教育も含めた社会教育的な立場から、持続可能な社会の実現に向けたひとづくり(＝未来を変える教育)のために必要なことは何かを探ります。 【ファシリテーター】 川嶋 直(公益社団法人日本環境教育フォーラム理事長) 【スピーカー】 関 正雄 氏 (損害保険ジャパン日本興亜株式会社) 上田 壮一 氏(一般社団法人 Think the Earth) 辰野 まどか 氏(一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト(GiFT))	新館ホール
18:30～20:30	夕食	新館レストラン
20:30～23:00	情報交換会 ● 「人と組織の紹介処(コンシェルジュデスク)」開設 ● 「環境教育リクルート」コーナー開設 ● 軽食、お飲み物をお出しする「Bar」も OPEN します	新館ホール

【 2 日目 】 11 月 17 日(土)

時間	内容	会場
7:00～8:00	早朝ワークショップ（自由参加）	
	1 ロシアからの旅人と再会しよう	屋外
	2 ヨーガと瞑想	
	3 山珊瑚で根付を作ってみましょう	アンデレホール
	4 清里朝散歩	屋外
7:30～8:30	朝食	新館レストラン/新館ホール
9:00～11:30	対話型ワークショップ	
	⑥ SDGs for School 未来の教育デザイン	新館ホール
	⑦ エコヴィレッジ、災害に強いオフグリッドの居場所作り	新館ホール
	⑧ 研修「設計」のススメ	本館ホール
	⑨ 公害の経験から考えるSDGs達成に向けた課題	ライブラリ
	⑩ 災害支援と自然学校の役割	C-2
	⑪ 美しい棚田を未来につなぐ 11 年の環境教育の実践	特別展示ホール
	⑫ ESDによる地域創生の可能性	ハンターホール
	⑬ エコ・自然塾	アンデレホール
	⑭ 野外フェス×環境教育の可能性をさぐる作戦会議	C-1
11:30～13:00	休憩・昼食・移動	
13:00～15:00	●全体会2「パートナーシップで未来を変える！」 ESD+SDGs のために、多様なステークホルダーとパートナーシップを組むことはとても重要です。全体会2では、他者と「競争」するのではなく、多様なステークホルダーと「共創」できる人材を生み出す教育のヒントを探ります。 ステークホルダーを巻き込み、画期的な取組みに挑戦している、パートナーシップの事例や取組みを多く発信するメディアの立場からそれぞれゲストを招きます。常識をひっくり返すような新しい実践事例、パートナーシップを組むに至った経緯を伺います。 【ファシリテーター】 中野 民夫 氏(東京工業大学／公益社団法人日本環境教育フォーラム理事) 【スピーカー】 藤田 香 氏(株式会社日経 BP) 大場 隆博 氏(NPO 法人しんりん) 山藤 旅聞 氏(都立武蔵高等学校・附属中学校教員) 田村 陽至 氏(ドリアン)	新館ホール
15:00～15:30	休憩・移動	
15:30～17:00	体験型ワークショップ・2	
	⑮ フルスイングの発酵ワークショップ	アンデレホール
	⑯ 読本「森里川海大好き！」を活かした環境教育へ	新館ホール
	⑰ 森カフェ GEMS マタギさんと算数-自然の恵み山御膳	アカマツキャビン
	⑱ 歌の力、体感ワークショップ	本館ホール
	⑲ UNCO ゲーム開発のためのβ版体験ワークショップ	新館ホール

	㊼ 教員向けエコ×エネ体験ツアーの手応えと可能性	C-2
	㊽ 森で元気に！キープの「森林療法」ちょこっと体験☆	ライブラリ
	㊾ ハラオチ納得！ジオガシキッチン教室	特別展示ホール
	㊿ 「地域を活かした教育力」	C-1
	㊿ 「九州・沖縄で暮らし続ける！」地域に根ざす SDGs	ハンターホール
17:00～17:30	休憩・移動	
17:30～18:30	●ポスターセッション	新館ホール
18:30～20:30	夕食	新館レストラン
19:00	★3日目の「当日募集ワークショップ」実施者エントリーの締め切り	
20:40～23:00	情報交換会 ● 「人と組織の紹介処(コンシェルジュデスク)」開設 ● 「環境教育リクルート」コーナー開設 ● 軽食、お飲み物をお出しする「Bar」も OPEN します	新館ホール
21:00	★3日目の「当日募集ワークショップ」参加者エントリーの締め切り	

【 3 日 目 】 11 月 18 日(日)

時間	内容	会場
7:30～8:30	朝食	新館レストラン
8:30～9:00	チェックアウト	
9:00～10:30	当日募集ワークショップ	各会場
	① SDGs に対する違和感を語ろう！！	C-3
	② ロールプレイ教材体験！！「三丁目の夕日@西淀川」	本館ホール
	③ 「UNCO」ゲームを考える！	C-2
	④ なんとかしたい！自然体験・環境教育のあんなコトやこんなコト	特別展示ホール
	⑤ 教員免許更新講習×自然学校	ハンターホール
	⑥ 意識が低い人が学ぶ SDGs	C-1
	⑦ 先祖からの贈り物を収穫する	アンデレホール
10:30～11:00	移動	
11:00～12:00	●全体会3「アイディアは地球を変える」 変化はほんの小さなアイディアから生まれます。 これを使えば何かできそう！あそこと組めばこんなことができる！ スタッフも交じってアイディアを生み出すダイナミックな対話セッションを行います。 【ファシリテーター】 鴨川 光 （公益社団法人日本環境教育フォーラム／ジャパン GEMS センター）	新館ホール
12:00～12:30	閉会式	
12:30～13:45	さよならパーティー（立食）	新館レストラン
14:00～15:00	オプション企画 会場であるキープ協会の施設を紹介するツアーを行います。 ① ポール・ラッシュ記念館見学ツアー ② やまねミュージアム見学ツアー（※入館料実費320円） ③ 聖ヨハネ保育園見学ツアー	

開会式・えんたくんミーティング

※敬称略

開会式

司 会	：	公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）事業部	垂水 恵美子
主催者挨拶	：	公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）理事長	川嶋 直
挨拶	：	環境省 環境教育推進室 室長	河野 通治

えんたくんミーティング

進 行 ： 公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）理事長 川嶋 直



えんたくんミーティングでは、まず 5～6 名のグループに分かれ、えんたくんを囲んだ。今回の参加の動機や自己紹介などをそれぞれ書き込み、決まったテーマは設定せずに話し合った。

途中で各テーブルに 1 名を残し、グループ替え。残った 1 名はそのテーブルで話された内容を共有し、その後、自由に話した。同様のグループ替えをもう 1 回した後、ホスト 1 名以外は自由に歩き回り、他のテーブルでどのようなことが話されたのか、えんたくんの書き込みとホストの話から伺った。

※えんたくん

直径 1m 程の円形ダンボール板。5～6 人が輪になって座り、膝の上にえんたくんを設置。対話の内容や気になったキーワードなどを自由に書き留める。「よく聴こう」「短く話そう」「言葉を書こう」が 3 つの約束。

全体会

※敬称略

全体会 1「SDGs がもたらした共創の可能性」

ファシリテーター：

公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）

川嶋 直

スピーカー：

損害保険ジャパン日本興亜株式会社

関 正雄

一般社団法人 Think the Earth

上田 壮一

一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）

辰野 まどか



新しい分野や人をつなぐハブのような役割として、SDGs をベースに新たな協働プロセスを生み出し続けている 3 名をゲストに招いた。15 分ずつ、SDGs に向けて「今起きていること」と「これから起こそうとしていること」についてご紹介いただき、環境教育も含めた社会教育的な立場から、持続可能な社会の実現に向けたひとづくり（＝未来を変える教育）のために必要なことは何かを探った。

SDGs に関する概念的なお話をいただき、参加者が 3 日間、SDGs を軸にして議論をするための共通認識をそろえる時間となった。

経団連は SDGs に力を入れている。企業行動憲章を昨年改定し、そこにも関わった。今日は、「SDGs のカギは企業が握る」「東京大会を SDGs オリンピック・パラリンピックに」のテーマで話をする。大事なものは生まれ変わるくらいの大規模な「Transformation（大変革）」。企業が関わるポイントはここにある。

2003 年は企業の CSR 元年といわれている。自分は 2001 年に CSR の担当になった。当時は MDGs（ミレニアム開発目標：2000 年）が言われていた。2015 年に SDGs が決定されるまでの 15 年、企業の役割はほとんどなかった。しかし SDGs は本業を通して貢献する考え方が強まっており、そのことは強く肌で感じている。企業は想像力、クリエイティビティー、イノベーションを生み出す力があり、SDGs には欠かせないと採択文書に書かれている。また 4 億人の雇用が生まれるとの試算もあり、大きなビジネスチャンスと考えられている。これも企業が関心を持っている理由の一つ。昨年、国連「High Level Political Forum」で開かれたビジネスフォーラムでは、この 1 年で応募者が 5 倍に増えている。昨年の参加希望者は 1500 人、今年は 4000 人。おそらく High Level Political Forum で一番人気の会議となったのでは。

企業は outside-in で物事を考えねばならない。先ほどの Transformation ともつながるが、今まで取り組んできたことをベースに上積みするのではなく、2030 年、2050 年のために我々は何をしなければならないのか。私に関わった企業行動憲章の改定では、「Society5.0」の考え方がポイントになっている。経団連としての SDGs 宣言として盛り込んだ。「Society5.0」は日本政府で閣議決定された基本計画であり、情報化の次の未来を指す。AI やロボット等を使い、1 人ひとりのニーズにきめ細かく答えつつ社会全体を最適化する人間中心の超スマート社会。これを実現する上で産業界が大きな役割を担う。行動憲章のサブタイトルに注目すると、以前は「社会の信頼と共感のために」、これが昨年の改定で「持続可能な社会の実現のために」と変更した。それを産業界が牽引すると書いてある。スタンスが積極的なものになった。また、あとの議論でも触れたいと思いますが人権の尊重が新たに条文として設けた。触れていなかったわけではないが、きちんと条文に入れたということ。

経団連も SDGs に向けて本気で、経団連会長が出るときも胸に SDGs のバッジをつけている。私自身も現時点でできているかは別として、これから SDGs が達成されるか企業が相当関わっている。経営方針に SDGs、または sustainability の言葉を入れて経営と一体化することが求められている。SDGs や CSV、ESG など次から次へと新しい言葉が出てくる。「今は SDGs だ！」もそれはそれでいいが、では CSR とどのような関係があるのか。日本の企業も横並び意識が強いので、悪い言い方をすると SDGs が流行りになって、SDGs ウォッシュ（グリーンウォッシュのもじり）になることが懸念。

また、東京オリンピック・パラリンピック大会にも関わっている。持続可能な大会にしようと議論する委員会があり、今年の 6 月に基本計画が発表された。（第二版）ECO にするのも大きなテーマだが、ここで紹介したいのは人権・労働の言及がなされていること。メガスポーツイベントを持続可能なものにしようという ISO もあり、注目を浴びている。企業 CSR 部門の担当者必読になっている「ビジネスと人権に関する指導原則」が国連から 2011 年に定められている。東京大会はこの原則に則って運営すると宣言している。次のパリ大会からは開催国が採用することが義務になった。東京大会は先立って自主的に取り入れた。一つ上げると、調達行動。木材や農産物、パームオイルなどの原材料は特に持続可能性に配慮する。これは環境だけでなく、人権問題にも関係する。ウェブサイトにも載っているのに関心のある方は見て頂くといいと思う。



ソーシャルデザイン、ソーシャルコミュニケーションが専門。主に Think the Earth と、美術大学でソーシャルデザインを教えている。コミュニケーションデザインはこれまで広告やプロダクトデザイン、商業、コマースリズムのことが多かった。そこにソーシャルが付くと公益性、共創性、継続性、それらを考え社会問題や環境課題を創造的に解決することになる。先ほど関さんの話で企業のイノベーションの話があったが、これはまさにど真ん中の話。創造性とイノベーションをもって社会課題を解決すること。教育にどうやってインストールするかを教育の方たちと関心を持っている。



たとえば最近ニュースになった「おてらおやつクラブ」。奈良の安養寺のお坊さん・松島靖朗さんが中心になって、余ったお寺のお供え物を地域の子どもの食堂におすそわけし、地域の貧困やフードロスに貢献する取組みが2018年グッドデザイン賞の大賞を受賞し、とても驚いた。宗教の場としてのお寺ではなく、ソーシャルな存在としてのお寺をもう一度復活させようという取組み。もともとお寺は地域社会に根付いていたが、今は七五三やお葬式だけという人も多い。松島さんの熱い思いが審査員の胸を打って、大賞の受賞となった。いわゆる昔ながらのグラフィックデザイン（見た目のデザイン）はひとつもない。今の時代だと思った。

Think the Earth はそういった社会課題を自分事として行動できる人や社会を増やしたいという願いをもって、20年プロジェクトを行っている。最近思っていることは、SDGs 自体、セクターや世代を超えて自発的な社会行動を促す仕組みとしてもものすごく優れたソーシャルデザインになっていること。先ほどから何度も出ているTransformer、私たちの世界を作り変えるという話だが、根こそぎ変えないと持続可能な社会はできない。中学生・高校生たちは社会のことを知らないからこそアイデアが出せる。それが本当に社会に影響を与える。今までは「何ばかなこと言ってるんだよ」だったものが、「それいいかも」「そっちなかも」に変わる。2017年、18年に学習指導要領が改訂される。持続可能な社会のつくり手を学校が育むこと、現代的な諸課題への取組み、教科を横断した学びが盛り込まれた。先生たちと相談しながら、大人と子どもが一緒になって未来をつくるというコンセプトで「SDGs for School」をスタートした。「未来を変える目標～SDGs アイデアブック」はクラウドファンディングからスタートし、今は企業協賛が5社ついている。自分たちなりのやりかたで約300校に本を届けて使ってもらい、500人の先生がSDGs for Schoolに登録。2018年8月には全国50人の先生が集まり、SDGsを使ってどんな授業が作れるか話し合った。明日の朝のワークショップではそのエッセンスをシェアしたい。

SDGs は机上で学ぶだけでは何も起こらない。山藤先生と始めた中高生のボルネオツアーでは、子どもたちがプランテーションで働く人とお話をしながら、マレーシアの同世代の子と話したり、植物博士に森の状況を聞いたりするうちに、どんどん自分事になっていった。中高生たちは自分の成長を自覚しながら旅をしている。同行していた筑波大学の2年生は、高校2年生のときボルネオツアーに参加し、今回は彼女がツアーを企画。彼女自身が成長していると感じた。

山藤先生がこの本を作る前に、こんなことを言っていた。小学校高学年の子たちから笑顔がなくなってしまう、何とかしたい。試験のために勉強することが、子どもたちから「今」を奪っている。試験のためにいい点を取ることがゴールなのであれば、一番になった人しか笑顔になれない。そうではなくて、17個のゴールがあるのであれば、17個の階段がある、それを作っていくのが本来の教育だと。アースデイの出展やヒカリエでのイベントを通して、「高校生だからこそ伝えられるものがある」と中高生自身が言っていた。自分の役割をわかっている。

“試験のために学ぶ”から“未来を創るために学ぶ”に変わったとき、目の前の大学入試や期末試験などの意味が変わる。その先の未来を生きるために何を勉強したらいいか考え、勉強が楽しくなる。何かしたいという子

ちが増えてきていて、「デザイン」と口々に言う。アートデザインのシンポジウムを中高生が企画したり、「Design,more」のタイトルでイベントを開催したり。デザインという言葉が今後キーワードになってくると思っている。ロンドンの芸術大学であるロイヤル・カレッジ・オブ・アートでは、BTC 型人材 (Business、Technology、Creative) が全部わかるハイブリッドな人間でないとこれから活躍できないと言っている。文系、理系、美術系と分けるのではなく統合的に学び、社会の中で活躍する人材になると。でも僕は足りないと思っている。最後に「S : Social」を入れて欲しい。この S の目標が SDGs だと思っている。逆に中高生にとって B、T、C はこれから学ぶ学問。中高生たちは Social から始まる。知識はないが何か社会のために実現しようと思った時に、何を学びたいのか考えるいいきっかけになる。そこに SDGs が未来の教育に大きな影響を与えるポイントになると思っている。

一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト (GiFT) 辰野 まどか

7 年前に GiFT を仲間とともに立ち上げ、教育を通してよりよい社会を作るために ESD や SDGs ともつながる教育プログラムを国内外で行っている。後ほど説明するが、SDGs のゴール 4 の中にある 7 の項目、ESD やグローバルシチズンシップ育成 (世界をよりよくする志し)、国際理解教育などに関わる人たちがつながる場づくりも行っている。今日は皆さんきっとこれからも付き合いが長くなると思うので、どうして私が SDGs に関わる教育をやっているか、少し話したい。



私の人生はアップダウンが激しく、人生のターニングポイントは高校 2 年生、17 歳。意識低い系の学生で、英語の勉強は大嫌い。海外にも、ましてや社会問題にも興味はなく、学校生活を楽しんでいた。ところが 17 歳の誕生日、母がテンション高く部屋に入ってきて「お誕生日おめでとう。すごいプレゼントを用意したよ」と言われた。夏休み、つまり来月にスイスで開催される国際平和会議に参加する権利だった。何を言われているのか全然わからなかった。行ってみると大人が本気で参加する国際会議で、NGO リーダー、政治家、ビジネスマン、いろんな方々が 300 人、アフリカ、アジア、アメリカ、ヨーロッパ、中近東…各地からリーダーが集まって、環境問題、貧困問題、都市問題、そういったことを毎日話し合った。戦後 50 周年の会議で、戦争について日本が何をしてきたのか、私は英語だけでなく歴史も知らないんだと打ちのめされた。ただその時に、それぞれ民族衣装を着た本当にいろんな国の人たちが、どうしたら自分たちが平和な社会をつくれるのか、まさに今日の清里の空気が似ているのですが、深く対話をしていた。今思えば、そこで話されていることは SDGs に関係するような問題ばかり。3 週間参加し、最後に皆さんの前で感想を発表しなければならなかったが、頑張って英語にして、心から思った本当のことを伝えたところ、目の前に座っていたヨボヨボのお婆ちゃんに突然、叱られた。「何言っているの、続いてほしいでなくて、あなたが続けていくんでしょ！」と。英語どころか世界のことも何も知らない、何も興味がない高校生だった私が、自分がこの平和な社会に生きているのはこうやって地球をよりよくしていこうと考えて行動している人がいるなんだと、深く感じた。同時に、今は何もできないけど、そういうことができるプロになろうと、強く決意した。その後、エコリーグの参加や COP3 の京都議定書づくりの参加、大学を休学して世界 70 都市でボランティアに取組み、まずは自分が「場づくり」を体験した。いつのまにか仲間が

たくさん増え、こういった場を一緒に作ろうと励まされながら、「世界をよりよくしようとする志づくり」という活動を始めるようになった。

SDGs が国連で採択されて知られるようになってから、GiFT はゴール 4、そしてその中のターゲット 7 に注目している。唯一、価値教育が表現されているため。数値にしにくいのが、マインドを持つことをまず目指している。ESD、平和教育やグローバルシチズンシップ、多様性などのキーワードがすべて含まれている。国際理解教育や開発教育、環境教育など様々な人たちがこの 4.7 のなかで一緒にできると気がついた。朝日新聞が最近された調査のなかでも、先生方が SDGs の認知度が非常に高いらしい。学校教員と、SDGs を知って熱くなられた方をつなげる場づくりをすれば、もっと加速的にこういった世界をよくする教育が広がるのではと思います、先生の研修なども作っている。SDGs も大きなゴールだが、最初のステップは自分の想いにつながることを。何にドキドキして、何にモヤモヤするのか、その感性から初めてそれを持つ仲間とつながり、志しをともに未来をクリエイティブしていける。それをもって社会に参画していくことを、グローバルシチズンシッププロセスと呼んでいる。世界 7 カ国でその思いを重ねながら、体験を通して次世代が行動できるプログラムを行っている。

こういった動きは世界 193 カ国で盛り上がっている。もちろん ESD の世界会議も盛り上がったが、今もそれが継続して、いろいろな国が SDGs をどう教育に入れるか話し合っている。改めて、SDGs は世界とつながるキーワードなんだと感じた。これからも GiFT は力を入れていきますので、皆さんと一緒に出来たらと思っている。



全体会 2「パートナーシップで未来を変える！」

ファシリテーター：

公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）／東京工業大学 中野 民夫

スピーカー：

株式会社日経 BP

藤田 香

NPO 法人しんりん

大場 隆博

都立武蔵高等学校・附属中学校

山藤 旅聞

ドリアン

田村 陽至



ESD+SDGsのために、多様なステークホルダーとパートナーシップを組むことはとても重要。全体会 2では、他者と「競争」するのではなく、多様なステークホルダーと「共創」できる人材を生み出す教育のヒントを探った。

ステークホルダーを巻き込み、画期的な取組みに挑戦している大場さん・山藤さん・田村さんと、パートナーシップの事例や取組みを多く発信するメディアの立場である藤田さんをゲストに招いた。常識をひっくり返すような新しい実践事例、パートナーシップを組むに至った経緯をそれぞれ 15 分ずつお話いただいた。

参加者がより身近で実感を持てるよう働きかけるとともに、3 日間の中日として、これまでの 1 日半でこれから何が必要と考えたか、また何に可能性を感じたかを考え、残り半分の期間をどう過ごすか整理する時間とした。

環境は温暖化だけでなく、社会面、働き方や NGO との関係、地域社会との絆など。昨日も企業の不祥事がありました。ガバナンスも重要ということで、ESG が重要と誌名を変更することになった。ESG は SDGs と目指すところは同じ。コンソーシアムを作って、150 社に参加いただいている。そこで見聞きした面白いパートナーシップの事例を紹介する。



企業の SDGs (ESG) や ESD も含めた取り組みは、SDGs のいろんな目標を見て自分たちに何ができそうか、自分たちが持っている技術や仕組み、発想を使ってどんなことができるかを考えている。課題から自分たちにできることを考えるアウトサイドが主流。今日のテーマである「未来を変える」とリンクするが、既存の取組みを延長するのではなく、まったく違う発想や転換をするようなビジネスにしましょう、というのが合言葉になっている。たとえば廃棄物処理の問題。これまではリサイクルなどを一生懸命考えていたが、そもそもごみが出ないように製品の保証期間を長くしたり、スベアを提供したり。これは大きなトランスフォーメーション (変革)。そういったことを考えるのが本当の SDGs の取組みだと思う。SDGs が国連で採択されたとき、企業は自分たちがすでに行っている活動を各目標に紐づけすることをまず行ったが、これからは「Transform」。新しい仕組み、新しいビジネスの在り方を考えなければいけない。企業はいろんなところとパートナーシップを組み、SDGs に取り組んでいる。企業同士、NGO との連携、JEEF のような環境団体、自治体、学校、市民など。

たとえば某飲料メーカーの面白い事例。ビールはホップを使うが、ほとんどが輸入品。国産のホップは 1 割前後しかない。それを作っているのが青森と岩手で、その農家さんと作ったものを 50 年以上使っている。しかし国産ホップの農家は減っており、45 年間で 10 分の 1 に。絶滅危惧種になってしまった。では輸入に頼るのか？ メーカーは産地を残すために、まずはその地域が活性化する方針を立てた。ホップ農園は防風林に囲まれており、なおかつ下草を残して育てているので、生物多様性が豊かで、里山の環境保全になっている。メーカーは遠野市と協定を結び、収穫体験ができる「ビールツーリズム」、マルシェでクラフトビールが飲めるサーバーの設置、地元の小学校での授業で地元知ってもらう取組を開始した。社員と経営者が一緒に考え、農家や現地 NPO も巻き込んで地域の食材とクラフトビールを楽しむ集いの場をどんどん作り、新しい市場に乗り出した。これまでの「企業がお金を出して社会貢献」ではなく、地域と連携しながらビールと食材を楽しむ、新しいビール文化を作っている例になった。「小規模農家を助ける」は SDGs の目標 2.3 にも書かれている。

三菱地所はここ山梨で、SDGs が国連で採択される前から都市と農村の交流プロジェクトを進めている。もともとは社員教育として田んぼづくりや間伐体験をしていたところ、社員から「せっかく間伐材が出るなら何か使えないのか」と議論が生まれ、地元の NPO・NGO や県も巻き込んで、系列住宅に FSC 認証の建材として使用するまでに発展した。また、三菱地所の本社がある皇居のお堀で水質浄化の新しいプロジェクトを始めている。三菱地所の浄化装置で浄化した水を堀に戻すと同時に、疲弊している絶滅危惧種を保護し、元気になったら戻す取組。デベロッパーとしても周辺環境が改善することは、価値の向上やブランディングに直結する。

最後、神奈川県がプラスチックごみゼロ宣言を出した。面白いのは、「施策はない」と知事がおっしゃったこと。宣言することでみんなが集まってくることがねらい。自然に還る素材はどんなものか、どんなやり方なら神奈川県で可能か、みんなに考えてもらえるパートナーシップのプラットフォームにしたいとおっしゃっていた。既存のアイディアで決めるのではなく、いろんな業種やステークホルダーが知恵を出し合うことによって、革新的なことが起こる——それを期待しているのだとか。今日はまさにそんなプラットフォーム、集いの場なのではと思っている。皆さんとの議論を楽しみにしています。



私は宮城県大崎市の鳴子温泉を中心とした森で、林業を通して循環する暮らしをつくることを目指している。森を中心に生産活動、家具や建築、教育、また森に戻る…という「循環する暮らし」。私たちが考えを持って活動する 200ha もある「エコラの森」は、バブルの時にリゾート開発のため切り開かれた後、倒産して開発が中止となった森。100ha 以上が伐採され、はげ山になっていた。そのまま植林されずに 20 年以上放置されると、草の方が強いので、木が生えてこない。それを再生し、新しい森づくりができないか。皆伐、植林、下草刈りを繰り返す従来の林業から、“未来的林業”にやり方を変えられないかという挑戦をしている。ハイブリット林業と呼んでいます。

木を作業道に下ろす作業は、馬搬と小型機械を組み合わせている。作業道は幅 2.5m、5t 以下の機械を使い、燃料には地元で回収したてんぷら油の廃油を使用。メーカーは保証してくれないが、ちゃんと動いている。一度作った作業道は、管理のためにずっと使えるものにしたい。山主がいつでも軽トラックで自分の山を循環できるようにすることで、愛着を持ってもらえる。一般的な林業だと大きい機械を入れるのに 10m の幅が必要だが、5t 以下の機械なら 3m で十分。道をつくるときに、たくさん木を切らなくて済みます。山に恩返しする気持ちで、地元の方や企業の方と春に植林イベントを開催している。100ha の植林をしようとすると、億単位のお金が必要ですが、回収が何年も先になる植林には銀行もお金を貸してくれない。企業の CSR 活動としてお願いし、年間 1ha 近くを植林。少しずつ少しずつ、100 年かけて戻そうとしている。

下草刈りは牛と馬の共同作業。牛は綺麗には食べてくれない。美味しい草しか食べないので、虎狩状態になったところを人が綺麗に刈るが、それでも従来の 1/3 ですむのでとても助かっている。牛を飼い始めて 7 年目、かなり効果は出ている。1 回刈ったところであれば、牛はずっと綺麗にしてくれる。どんな草でも新芽は美味しいらしい。実際に牛が下草刈りしたところとしていないところでは、木の成長がまったく違う。私たちは山を持っていないので、手入れをしていない山の山主さんと長期契約を結び、林業経営計画を立てている。国や県の助成金と木材の売りあげで作業費を捻出するため、山主の負担はない。昔の馬搬のように山盛りにして出すのではなく、2-3 本を短距離で引いてもらう程度なので、馬の負担にもならない。トラックが通る作業道まで引っ張り出し、それを 2t ダンプで大きい道路まで運び、工場に届けている。

自分たちのやり方を変える挑戦と同時に、若い人たちに林業の世界へ入ってもらいたい。林業はカッコイイと思ってもらえるようにしたいが、従来の林業ウェアはあまりセンスがない。そこでアウトドアメーカーのモンベルに何度もお願いして、昨年から本格的に林業ウェアを取り入れてもらった。チェーンソーや重機を運転するときの着心地をフィードバックすると、改良してくれる。これは皆さんへのお願いだが、もしモンベルのサポートカードを持っていたら、NPO しんりんのカードを作ってもらいたい。モンベルで買い物したときのポイントと同額がしんりに寄付される。どうしても冬の間のエサ代が稼げない。雪が降ると草がなくなってしまうので、近所の農家さんから草を買っている。その分だけでもサポートしてもらいたい。

しんりんはグループで動いているため、この活動ができている。企業とは、セブンイレブンのレジの募金箱やイトインコーナーの机などを私たちが作ったり、森づくりのサポートを行ったり。また、家を建てる方との伐採ツアーや、子どもたちとの間伐体験、板倉式という家を建てる体験なども行っている。NPO 法人しんりんが伐採した丸太は、くりこまくんえんの工場で製材し、サステナライフ森の家という工務店が買う。多少欠点があっても、じゅうぶん使える材は使える値段で買ってくれる。木の値段がさがることがないため、しんりんが収入を得る仕組みができている。日能研の協力で未来の森づくりの教育にも力を入れている。100 年、200 年の森

を作るには未来をつくらねばならない。そのための教育。今後は、地域の山の恵みを賄う生活への挑戦として、「サステナブルヴィレッジ」の計画を立てている。山で暮らしていくための産業を作り、お金を稼ぐための経済活動ではなく、いろんな産業がパートナーシップを組んで、未来を創る地域の活性化をねらっている。

都立武蔵高等学校・附属中学校 山藤 旅聞

本職は都立の中高一貫校で理科・生物の教員、Think the Earth に所属して全国に SDGs 教育を届けるとともに、学校を超えた教育活動を進める「教育デザインコンフェイト」を立ち上げて、3足のわらじをはいている。SDGs を通じて民間の皆さんとつながった教育活動を展開しており、その事例を紹介し、もっと教育界を皆さんの仲間に入れてほしいと思っている。僕を通じて、これからの学生たちの魅力を伝えていければ。



たとえば3学期、自分たちが1年間勉強した内容をどう作ったら次の後輩たちがワクワク勉強できるか、授業で生徒に作らせている。学習指導要領を読んで、国の意見も考えて大切な1行1行を踏まえたうえでの教材開発・教科書開発。すると、「教科書よくできてるな〜」と言い始める。でも、面白くない。生徒たちは楽しく勉強するために、4コマ漫画の導入や、QRコードで飛んで動画が見られるとか、大人にないアイデアをたくさん出してくる。2ヶ月半かけて議論し、できあがった教科書をまとめて、実際に教科書会社へプレゼンに行った。教育とは「本物の場」。こどもたちが何のために学ぶのか、自分の言葉でつくれるようになること。想いをもって活動している大人が真剣に自分の話を聞いてコメントをくれること。これが彼らにとっての評価になる。

僕が授業で教えているのは、「Design for ALL」。何のために、誰のために考え・試行し、活動していくのか、学んでいくのか。語れるようになってほしいと伝えている。世界に10%しかない先進国の、我々のためにデザインが進んでいた時代があった。ところが1990年くらいから2000年にかけて、デザインの方向性が変わり始めたと言われている。本当のデザインは、本当に困っている人のために使っていくものだ。たとえば浄化ストロー。これで泥水が飲めるようになり、アフリカの女性が水くみという労働や、学校に行けなくなる問題がこの技術で突破できた。こういう技術を考えていくことこそ、本当に僕たちが学び、思考していくことではないか。

ユニバーサルデザインの概念を提唱したロナルド・メイスは、4つのことを挙げている。1.これからの市民80億人すべてのひとのために考えること（For ALLは誰か）。2.これから生まれてくるまだ見ぬ命のために正しいデザインか、物差しを持って思考すること。3.今の地球にボタンをつないでくれた先代に失礼でないデザインをすること。4.地球すべての生物が生きるデザインをすること。この4つの軸を常に考えながら、教育を伝えていくようにしている。SDGsはこれらを伝えるときの窓になり、現場で起きている社会課題が見えるようになる。企業・社会で何が起きているか分かったら、僕はさっきのようなアイデアを届けに行くことができる。社会課題が起きている、解決しようとする皆さんのような大人と学校をつなげるコネクタになることが、これからの未来教育として考えていきたいこと。そこで、アフタースクールというかたちでこの活動を始めた。「Design for ALL」のマインドを持つ生徒や、今の効率的な授業でなくじっくり時間をかけて考えていきたい生徒が、僕の放課後クラブに集まる。今はSNSが当たり前、情報0円が当たり前、便利が当たり前。何のために生きているのだろう、なぜこんなに便利なシステムがあるのだろう、もう必要ないのに…そんな子が多いと感じている。シャ

ワーのように 100 歳まで生きるのかもという時代に生まれたこの子たちは、すでにソーシャルデザインのセンスを持っている。僕は彼らに、現場をつくってあげたい。そこで SDGs に出逢った。

他の教科、他の学校の先生や、コミュニケーションデザインをしている方、社会の皆さんがジョイントするようになった。オーガニックコットンの切れ端や売れ残りを使ったナプキンを作って、生理がくると学校にいけないアフリカの女の子に送る。定置網漁で市場に並ばない魚が 1-2 円で売られる現状を見て、高校生レストランを東京で開催することでその美味しさを伝える。東京都檜原村で耕作放棄地を手ぐわで開墾してオーガニックコットンを作り、デニムリボンを作る。同時に、学んだことをどう親の世代に伝えるか、生徒は議論しています。もっと身近な商品、たとえば自動販売機などを使って啓発できないか、そのためのパートナーシップを組んでもらおうと企画書をつくっている。SDGs は後付けだが、29 のプロジェクトが生まれ、学校と社会がつながる新しいキャッチが生まれた。生徒たちが欲しいのは、本気になっている大人の後ろ姿と、本気で評価してくれる姿。皆さんと、協働していきたいと思っている。SDGs のキーワードは Transformation。画期的に変えていこう、そんな想いを持った子どもたちが、これから続々と出てきています。ぜひ皆さんとつながって、僕たちからはセンス抜群なアイデアを提供するので、組んで頂ければと思っている。

ドリアン 田村 陽至

広島でパン屋を営んでいる。パン屋の前は大学で環境の勉強をして、卒業後は北海道で山や自然ガイドの仕事をしていた。その後モンゴルに渡って、今は 3 代続く実家のパン屋。もう 15 年になる。なぜ今日ここで話をさせて頂いているかというと、JEEF の機関誌「地球のこども」に記事を書かせて頂いたから。そこではパンを捨てていないということと、なぜ捨てないことが実現できたかを紹介した。それは「手を抜く」こと。ウィーンのパン屋で学んだ。「手を抜く」ことは、日本の企業や職人さんは苦手だが、仕事の効率も上がり、儲かり、食品廃棄もなくなった。朝日新聞の一面にも紹介された。なぜ取り上げられたかというと、労働改革・働き方改革の問題と、食品廃棄の問題、2 つの問題を同時に解決できた方法が「手を抜く」という簡単なことでできたということで、一昨日、本の発売にまでなった。



今日の題目は「パートナーシップで未来を考える」。自分は個人商店をやっているのですが、今までお三方が話してくださった大きい規模からもう少し身近な、スタッフと会社のパートナーシップ、同業他社・パン屋さん同士、関係している財団さんとのパートナーシップ、もうひとつはお客さんとのパートナーシップが変わってきていることをお伝えしたい。

まず、スタッフとのパートナーシップでは「お金が邪魔をする」。ドリアンの研修では、無給で 3 ヶ月働いてもらうことにしている。短期間だが薪窯でパンが焼けるようになり、研修生 9 人中 3 人が独立した。それくらい学びが深い。「お金が邪魔をする」とはどういうことか。お金が介在しないと、スタッフとの間に何が起ころか。粉袋を持ってくれるだけでとてもありがたい。なんなら運んでくれたりすると、なんていい子なんだって思う。洗い物までしてくれたら、この子は特別な子だ！と感謝の気持ちが生まれる。給料を払っていると、それが当たり前になる。もう 1 つの違いは、給料が発生しないので稼ぎは自分の分だけ。2 人で 1 人分の仕事をすればいい

ので、感謝の気持ちもあって、教えてあげたくなる。ありがたいし、よくやってくれるし、自分も余裕がある。研修生側は、お給料をもらうわけではないので技術の習得や自分に変化を与えることに全力を注ぐ。こちらは教えてあげたいと思う、研修生は学びたいと思う、ガチッと2人の目的が合う。その3ヶ月は普通の職人仕事に入る3年分くらいの意味がある。実際、研修生にはたくさん人を紹介してあげたり、飲み連れて行ってあげたり、すごくよくしてしまう。

研修生や見学者には、志と一緒にできると思った人にはレシピもあげるし、写真も好きなだけ撮っていつでもらう。今、レシピは隠せない時代。気持ちよく出すと、情報は戻ってくる。1人が一生で集められる情報量はたかが知れているが、たとえば10人に放出すると、10人から返ってくる。それを自分で咀嚼して、また出すと、また返ってくる。そうやって循環して業界全体がよくなっていくことは、自分にとってもお客さんにとってもいいこと。よく言われる自立・分散型の社会の仕組み。それぞれ活躍し、情報が行き来して、というのがSNSやインターネットを使えば直接会わなくてもできる時代。たとえば自分がパン屋を始めた頃、まだ薪窯の作りはとても拙くて、原始的なものしかできませんでした。この作り方を教えると、教えた先やさらにその先で多数の人々の手を渡って改良され、自分がまた作る時はフランスに負けない窯が作れた。これが自分1人だったらどうか。こうした方が、楽しいし、いいものが作れるし、関係性もより強くなる。

ドリアンの作るパンは、でかくて、重くて、固い。常食で食べる人はそんなにいないので、常連さんのためにパンを焼いている。少し前だとコンサルタントに、客層を増やしましょうとか、メディアを使ったら何万人に知ってもらえることができるとか言われましたが、もうそんな時代ではない。1億人に嫌われても300人の常連さんがいたら、個人店は暮らしていける。その人たちのために、家族のために焼くような気持ちで作っている。だからドリアンは、あからさまに常連さんをえこひいきする。列が並んでいても、常連さんと話し込んだり。それはヨーロッパのスーパーを見たから。向こうは列が並んでも、スタッフと客が話をしている。自分の番が来たら自分も心の通った接客をしてもらえろという担保があるので、並んでいる人たちも納得している。そういう接客をしていると、近くに大きなスーパーができてもお客さんが流れない。ありがたいことにメディアの取材なども多く頂いているが、「常連さんのためになるなら」を基準にしている。常連さんに伝えきれていなかったこと、日頃考えていることを伝えられると思ったらお受けする。テレビなどで見てダッときたお客さんは99%いなくなるので、並んでいても、常連さんと話していたり、常連さんのためにパンをとっておいたり。コツコツやっているとそれがお店の体力になる。

全体会 3「アイデアは地球を変える」

全体会 3

ファシリテーター：公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF） 鴨川 光



全体会 3 は、清里ミーティングで得たものを持ち帰るため、言葉にして落とし込む時間。スタッフも混じって、全員でアイデアを生み出すダイナミックな対話セッションを行った。

ホール全体にロール紙を敷き詰め、思ったことや感想、議論のなかで出たキーワードなどを思い思いに書き込んだ。このロール紙は、書籍などを作る時に使った残り紙。書籍を印刷する際はロール紙の単位で購入されるため、残ってしまったロール紙は廃棄される。それを分けていただいて、今回の全体会 3 で使用した。

3 日間で印象に残っていることを共有するとともに、やってみたくなかったことを話し合い、意見を出し合った。引っかけた言葉、思ったこと、アイデア、やりたいことをダイナミックに床のロール紙に書き込んだ。最後は自由に動き回り、気になったり共感した言葉をそれぞれ写真に収めて回る時間を設けた。

参加者自身が企画・実施者となるワークショップを開催した。実施者でない参加者は自身の興味・目的に合わせて参加プログラムを選択し、各ワークショップ会場で参加者同士の活発な意見交換が行われた。実施のあったワークショップは以下の通り。

- ・体験型ワークショップ・①（90分）……………1日目午後
ご自身が実践されている、あるいはこれから実践しようとしている活動を紹介することを目的とした、アクティビティ中心のワークショップ。
- ・対話型ワークショップ（150分）……………2日目午前
持続可能な社会を目指したひとづくり（未来を変える教育）に向けた新たな視点の獲得や、課題解決へのビジョンの創造を目的とした、ディスカッション中心のワークショップ。
- ・体験型ワークショップ・②（90分）……………2日目午後
ご自身が実践されている、あるいはこれから実践しようとしている活動を紹介することを目的とした、アクティビティ中心のワークショップ。
- ・早朝ワークショップ（60分）……………2日目朝
朝の澄んだ空気の中で、前日の疲れや酔いをリフレッシュし、1日活動するためのエネルギーを充填するワークショップ。
- ・当日募集ワークショップ……………3日目午前
清里ミーティング中に出会った参加者どうし、その場で生み出すワークショップ。
2日目の夜までに企画をエントリーし、他の参加者によるサインアップ方式で参加表明する

WS01:体験型ワークショップ・①(90分)

SDGs に果たす ESD の役割

実施者：阿部 治（立教大学/JEEF 理事）

【概要】

ESD と SDGs のかわりについて、基本的なところから知りたい方向けのワークショップ。実施者から ESD と SDGs の基礎的な解説があった後、えんたくんを使ったディスカッションが行われた。

【実施内容】

ESD 初心者から、ESD 関係の仕事をしている人までさまざまな人が参加した。まずは実施者から、ESD と SDGs の基礎的な解説。今世紀最大の 2 つの環境問題として、気候変動と生物多様性の問題があり、日本の課題は東電福島第一原発の問題、少子高齢化・過疎化、頻発する激甚な自然災害（地震、気候変動に伴う大型台風など）、低い食料自給率などがあげられる。このままでは持続不可能であることは明確であり、持続可能な（地域）社会への早急な転換が不可欠である。環境問題の解決には技術開発、法制度の整備、意識改革が必要とされており、そのためには環境教育（ESD）が必要となる。

ESD について参加者が理解できたところで、5 人組に分かれてえんたくんミーティングを行った。「SDGs の 17 の目標で自身が最も関心のある目標と他の目標を関連付ける」「テーマ1であげた目標を通じて SDGs を達成していくために ESD をどう使うか」をテーマにディスカッション。「気候」「環境問題」「教育」の単語が各テーブルで多く出され、SDGs の問題はすべて教

育によって解決できるのではないかと意見が出された。企業が ESD に取り組むことの大切さ、子どもへの意識の持たせ方などの議論がされ、教育とともに「体験」を通じてまず自然にふれ、問題意識を持たせることが大切である。そのことに気づき、自分・他者・自然のつながりを感じながら、教育によって解決に導かれるという結論でディスカッションは終了した。



【記録担当者】伊東 夏寿

WS02:体験型ワークショップ・①(90分)

自然観察で知る生物多様性、命のあり方、人という生物

実施者: 安西 英明 (公益財団法人日本野鳥の会/JEEF 理事)

【概要】

自然観察会を体験し、宇宙・生命・生態系の基本的な捉え方を確認し、そもそも私たちはどのような生物なのか？を考えるワークショップ。「どう伝えるか」の前に、何を伝えるか、持続可能性の資源ともいえる生物多様性についての基礎的知識を学ぶ。

双眼鏡を持って外で鳥の観察をしたり、部屋の中で鳥の羽や植物の観察をしたり、ときおり関連する生きものたちの生態やその周辺環境、人との関わりなどの知識を披露しながら、自然のサイクルや観察のポイント、生態系の基本的な捉え方を再確認した。

【実施内容】

自己紹介の後、実施者から「もし鳥に生まれ変わるとしたら」と問いが投げかけられた。選択肢は 2 択、カゴの鳥か野鳥か。参加者の答えはカゴの鳥派が 5 人、野鳥派が 22 人、その他(ウミネコ、コンドルなど種類が指定)が 7 人。そこで実施者から語られたのは、200 万種の種類の生き物が暮らすこの地球上で、他種と「共存」し、「循環」を大切にするということだった。

続いて複数の鳥の羽が参加者に配られ、観察した。サイズが異なるスズメ、ムクドリ、ハトの羽だ。鳥は地域、季節、環境によって簡単に同定することができる。生物多様性について考えるとき、教材にしやすい生きものである。クチバシの話、食べ物のこと、そこからつながる植物や蛾など虫の繁殖や生き残るための特性について語られた。次はいよいよ外に出て観察を行う。その前に、「踏まない」「採りすぎない」のフィールドマナーが伝えられた。地衣類、コケ類、キノコ類、虫、蜘蛛に注目する。

外に出て双眼鏡が配られた。使い方のコツや注意点が伝授

され、参加者は夢中で双眼鏡をのぞきこんだ。観察をしながら、シラカンバ(白樺)が冬の寒い期間に育ち春に芽生える準備をしていること、シダ・コケは地球の生きものの大先輩であること、シジュウカラの親戚であるヒガラは高い針葉樹の上に生息すること、キノコは 4500 種もあることなどなど、清泉寮の周辺でたくさんの自然物を発見するたびに実施者からの解説が入った。生態に関することにとどまらず、キノコ(=菌)から分解者の話に入り、分解者の存在によって自然のサイクルが保たれることが説明された。

部屋に戻り、これまでの観察を通して「自分が何者か」「命とは何か」を考える時間を設けた。



【記録担当者】檜垣 圭輝

WS03:体験型ワークショップ・①(90分)

学生版清里ミーティング実施に向けた作戦会議

実施者: 永沢 亮祐(ホールアース自然学校・学生リーダー)、松尾 章史(ホールアース自然学校)、
園田 佳菜子、吉川 隼人、澤地 生紗(ホールアース自然学校・学生リーダー)

【概要】

ホールアース自然学校が実施する「学生リーダー養成講座」の取組みの一貫として、来年 3 月に学生版清里ミーティングの開催を計画している。「子ども達とキャンプするのが好き」「アウトドアが好き」「野外教育に興味がある」そんな学生が増えているにも関わらず、学生同士が集まってざくばらんに話せる場が少ないと感じている。前半は実施者から現段階での大まかな構想・目的を共有し、後半で参加者を交えた意見交換を行った。

【実施内容】

実施者の自己紹介の後、ホールアース自然学校が行う「学生リーダー養成講座」についての紹介、またその活動の一貫として来年 3 月に開催を計画している「学生版清里ミーティング」についての構想と目的が参加者に共有された。

参加者を交え、ミーティングをより良いものにするための意見交換が行われた。まず、『意見/アドバイス』『もし自分が協力するなら』『学生/社会人としてのニーズ』の 3 点について、参加者 1 人ひとりが付箋に自分の考え・キーワードを書き出した。ある程度作業が済んだところで、書き出した内容を発表しつつ、1 枚の大きな模造紙に意見をグループ分けした。

課題として、1:運営面(開催場所・費用・学生のみでの運営の可能性・呼びかけ方法、3 月までのスケジュール)、2:実

施内容(テーマ・目的、方向性)、3:その他、学生がやりたいようにやるのが良い、「人」をコンテンツにするなどがあげられた。

最後に、実施者・参加者を混合し 2 つのグループに分け、これまでに出了意見を踏まえた上で再び話し合いを行った。その後、両グループの代表者 1 名がグループの意見をまとめて発表し、共有した。様々な意見・アドバイスから、学生版清里ミーティングの実施に向けて、現状の課題の認識・整理や新たな視点・アイデアを発見する機会を得た。



【記録担当者】田中 嘉一

WS04:体験型ワークショップ・①(90分)

棚田米を土鍋で炊いて、味わい、お米の魅力を探る

実施者: 永菅 裕一(NPO 法人 棚田 LOVER's)

【概要】

棚田は主食のお米を育て、生き物も多く、洪水調整につながる素晴らしい環境教育の場である。その棚田で育てられたお米を土鍋で炊いて、味わうワークショップ。土鍋での炊き方やお米を育てることの魅力、それらがどのように環境教育につながっているかの解説、また、農薬を使わずに栽培すること、自然乾燥の秘訣も伝授。参加者全員で味わった。

【実施内容】

初めにお米の知識を問うクイズが出題された。全部で 4 題出され、正解者には実施者特製の本皿がプレゼントされた。

次に「自分が今まで食べた中で一番感動した料理」が話題に自己紹介。参加者は自らの経験談と共に料理について語った。参加者の中にはブラジルから来日された方もおり、「日本に来て初めて食べたお米がモチモチしていて美味しかった」。

続いて土鍋ご飯の炊き方の解説があった。佐藤初女さんの著書を全員で音読し、お米を炊くことに対する考え方、おにぎりをつくることに対する考え方について様々な感想や意見が交わされた。

最後に実施者創設の NPO 法人棚田 LOVER's の活動内容を紹介し、全員で棚田米(玄米)を試食した。参加者全員が土鍋に手を入れ、まな板の上でぶし半分程度の大きさのおにぎりを作り、漬物(ラディッシュ、大根を塩麹に漬けたもの)と納

豆、味噌汁と一緒に頂いた。納豆は市販のもののほか、有機納豆、ワラに包まれた納豆など 4 種類が用意された。参加者の中には初めて玄米を食べた方もおり、時折会場から驚きの声が上がった。参加者に炊飯器のお米と比べてどう違うのか聞いてみたところ、「食感が違う」「味がギュッとしている」「体に良さそう」「自然の恵みの味がする」などの意見があった。



【記録担当者】江端 聡

WS05:体験型ワークショップ・①(90分)

JOLA～アウトドアで「未来のための人づくり」～

実施者: 増田 直広・佐藤 繁一(JAPAN OUT DOOR LEADERS AWARD 運営委員会)

【概要】

JAPAN OUTDOOR LEADERS AWARD (通称:JOLA) は、アウトドアで「未来の日本のための人づくり」に取り組む指導者を応援するアワード。これまでの取り組みの概要を報告すると共に、指導者評価に活用している「JOLA ルーブリック」を紹介し、ルーブリックを使ってみることを通して、意見交換を行った。

【実施内容】

日本では自然体験のリーダー(指導者)などを通じて、アクションを起こしている人たちは多数いる。しかし資金的な面で、優遇されていないという側面がある。その課題を解消するために、よりよい未来に向けて人材育成を行なっている人々を募集し、企業の協力やサポートスタッフにより評価を行い、表彰を行っている。それが JAPAN OUTDOOR LEADERS AWARD (通称:JOLA) である。

応募は基本的に自己推薦による。推薦書や功績から運営委員が「ルーブリック」と呼ばれる方法で評価を決定している。自然教育の指導者に求められる資質を項目立てし、5 段階評価をつける。その合計が評価の数値となり、受賞者を決定する。この方法は日能研などの企業で、社員の評価を行うとき実際に用いられているものである。

JOLA のアワードはまだ始まったばかりであり、受賞がそのまま今後大きく影響するわけではないが、自分のやってきたことが評価されることの喜び、目標に向けた達成度を再確認する

とともに、他にどのような取り組みがあり、どのような人がいるのか知る機会にもなり、今後の活動にも良い影響を与えている。参加者の中に本アワードの受賞者がおり、そう語った。

JOLA の評価手法「ルーブリック」を実際に使い、参加者が自己評価を行った。「項目が統一されているので分かりやすい」「自己評価を下すのは客観視が難しい」「主観的な意見を入れ込むため企業や職場では、同期同士で評価をシェアすることで客観的な意見と主観的な意見を混ぜて考えることができる」などの意見があげられた。



【記録担当者】杭田 広人

SDGs for School 未来の教育デザイン

実施者: 上田 壮一(一般社団法人 Think the Earth)、山藤 旅間(未来教育デザイン Confeito)

【概要】

中高生を対象に未来の教育作りを行っている「SDGs for School」の取組みを通して、教育のデザインを考えるワークショップ。Think the Earthの書籍「未来を変える目標 SDGs アイデアブック」を使った模擬授業と、それを受けた生徒たちが実際にどのような行動を始めたか、中高の学校教員でもある実施者から解説があった。

生徒と社会が上手につながると、学び方(生き方)に大きな変容が起こることを何度も目にしてきた。これから大きな変革が訪れる教育の現場において、SDGsを題材にどのような授業やプログラムが有効かをディスカッションした。

【実施内容】

1) SDGsと教育を結びつける事例紹介

SDGsに取り組む中高生のために授業や企業連携を行う実施者の2人が、これまでの活動を紹介した。

まずは上田氏が、どちらもコミュニケーションの仕事であるという視点から、教育と広告制作の共通点を話し、クリエイターと学校の先生を結びつけることで面白いことが起こった事例を紹介した。

Think the Earthでは『未来を変える目標 SDGs アイデアブック』を出版し、子どもも大人もSDGsについて学べる教材として、学校などで活用してもらっている。

2) 授業内容の解説

中高の学校教員である山藤氏が、実際に中学や高校で行っているSDGsに関連づけた授業実践の紹介があった。山藤氏の教育理念には、すべての地球市民とこれから生まれる命、今の地球というバトンを託してくれた先祖、地球の生態系に生きるすべての命のためにデザインするという「Design for All」の考えがある。この理念を生徒と共有し、課題解決型教育を手段として実践している。

具体的には、生物の授業では、2~3週間の期間を生徒が自由に実験できるようにするなど、生徒の主体性を重んじる教育であったり、SDGsと教科書の学びとのつながりを意識させ、社会課題とのつながりに生徒が気づいていく授業を手掛けている。

3) 模擬授業の体験

山藤氏によるSDGsの模擬授業を受けた。20分ほどに短くしたものだが、生態系ピラミッドの図をもとにSDGsを学ぶ授業と、チョコレートを食べながら社会課題を考える授業の2つを体験した。

食物連鎖を構成する生物のうち、生産者の物質やエネルギーの量を底辺に表し、捕食者の物質やエネ

ルギー量を表すと、上位捕食者になるほど小さくなるピラミッド型に変化するようすを表したものが「生態系ピラミッド」である。小学生から中学、高校、大学でも理科や生物の授業で登場する。ピラミッドのどこかの栄養段階が変化しても、本来であれば、他の栄養段階とのバランスによって最終的に元のかたちに戻ることができる。だが、問題は私たち人間の存在である。人間はあらゆる生物を消費している存在であり、現在世界では人口が急速に増加している。一方、世界中で1秒間にテニスコート20万分の森林が減少している。人が増え、植物が減ることで生態系ピラミッドが崩壊し、社会に大きな影響が出ることを学ぶ授業だった。

また、2種類のチョコレートを食べ比べてみた。これは一方がアブラヤシからとれるパームオイルを使ったもの、もう一方はカカオからとれるココアバターで作ったものだ。パームオイルで作られたチョコレートは口溶けがよいなどの理由で好んで食べられるが、生産地ではアブラヤシのプランテーションの問題が社会課題となっている。東南アジアのプランテーションで作られるパームオイルは豊かな熱帯雨林を破壊し、ゾウが害獣として駆除されている。さらにプランテーションには他国から女性が働きに来ることや、その子どもたちが十分な教育を受けられていないことなど、SDGsの視点からパームオイルにまつわる社会問題がどのように見えるか、解説した。

4) 中高生がSDGsを学ぶ活動

中高生が企業や自治体と連携した事例が解説された。オーガニックコットンの端材が廃棄されていること、アフリカなどでナプキンが不足している問題をあげ、オーガニックコットンで布ナプキンを作成し、アフリカに届ける活動を行った。また、三重県では定置網漁業の体験を通じて、地方創生の課題を学び、この学びを消費者に伝えるために、東京で高校生レストランを立ち上げようとしている。このように、現場に赴き、自分事として体感する取り組みを通じて、SDGs課題を解決するプロジェクト型の教育が多く行われている。

5) 学校との協力について考える

最後に、えんたくんを使って「みなさんが学校と一緒にできそうなこと」というテーマでアイデアを出し合った。学校とコラボする方法、ITや農業、大学など、参加者が様々な観点から学校との協力方法を考えた。

【記録担当者】珠村 智

エコヴィレッジ、災害に強いオフグリッドの居場所作り

実施者：大場 隆博(NPO 法人しんりん)、高木 幹夫(日能研)

【概要】

本ワークショップでは、NPO 法人しんりんが取組んでいる、宮城県大崎市鳴子温泉を拠点としたエコヴィレッジ（災害に強いオフグリッドの居場所作り）を糸口とした、持続可能な村づくりの可能性・新たな暮らし方の提案を主なテーマとして、実施者・参加者の間で意見交換が行われた。

日本の伝統建築「板倉構法」、木質バイオマスエネルギーを利用した熱と電気両方を供給するシステム。家庭菜園、牛や馬の放牧、1次産業を中心とした働く場所の提供、インバウンドや長期受入れのための宿泊施設、周囲の自然環境を活用した教育などたくさんの可能性を考えている。エネルギーは自給を目指しつつ、交流はオープンにしていきたいという実施者の信念のもと、この村の可能性を語り、持続可能な新しい暮らしの広がり考えた。

【実施内容】

1) 新たなサステナビリティを鳴子温泉に

NPO 法人しんりんは森を中心に、循環する暮らしをつくることを目指している。100年・200年の森づくりを進めていくには、10年後・20年後の人材を育成していく必要がある。利益追求第一の経済活動では未来へ続いていけない。生活していく上で必要な最低限の収入を確保することは重要としながらも、思いのある経済活動が未来をつくっていく。

現在、建設を進めているエコヴィレッジ（集合住宅）の概要が紹介された。建物は地域産材を利用した板倉工法（壁塗りを行わない木造建築の伝統工法）で、エネルギーはすべて自然エネルギーで利用ができる。家庭菜園もあり、牛や馬と共に暮らす生活を理想としている。将来的に3世代が住み続けられる家になるのがポイント。賃貸を可能にするとともに、長期滞在型のインバウンドによって注目を集め、日本人の滞在を促したい。

「災害に強いヴィレッジ」たる所以は、電気・水道・冷暖房などのライフラインや食料が自給自足で賄える仕

組みのため。現在、日本では地域熱供給にあたって配管設備の費用が課題になっている。将来的にはこのヴィレッジを実験・研究の場として、ノウハウを他の地域に水平展開することを目指している。

2) 暮らし方の提案と提供

参加者と実施者で活発な意見交換が行われた。テーマは以下の通り。

- ・どんな機能・空間があったら住みたいと思うか。
- ・どんな暮らし方があるか。
- ・地域で暮らしていくうえで課題となるのは何か。

参加者からは、移住先である地域の人たちに受入れてもらうことの難しさについて意見が出された。「まずエコヴィレッジが居場所を作って受け入れてくれると、入って来やすい。そこから地域と関わりを持つ活動を進めていくことができる」

また、「エコヴィレッジが災害拠点となり地域に受け入れられる」「散歩ができる空間が魅力的」「地域の炭でバーベキューを行うなんてとても贅沢な暮らしだ」といった意見がでた。他、若い世代が地域で暮らしていくために仕事をつくる・地元の学ぶ教育の実施などが課題として挙げられた。

エコヴィレッジでの暮らしづくりのノウハウを他の地域でも水平展開していくことができれば、自然資源が豊かである地域だからこそその暮らし方の提案・新たな村づくりの展開が期待できる。



【記録担当者】田中 嘉一

研修「設計」のススメ

実施者：川嶋 直（公益社団法人日本環境教育フォーラム）、宮森 由美子（環境省自然保護局国立公園利用推進室）

【概要】

設計図なしでは大工さんは家を建てられません。譜面なしではバイオリニストは演奏できません。では研修やシンポジウムの場の設計は誰がしていますか？

実施者が30年以上人材育成事業（特に集合研修）実施の経験からたどり着いた、集合研修＋その前後の様々な工夫を公開。企画段階から「誰にどうなって欲しいと描き&受講者中心の設計」が出来ているかをポイントに設計の解説を行った。例として、昨年から始まった環境省国立公園満喫プロジェクトで実施している、現時点での人材育成事業の設計を紹介し、現実的で実施可能な「研修設計」のあり方について意見交換を行った。

【実施内容】

1) 研修設計のレクチャー

自己紹介の後、実施者から本ワークショップの目的と趣旨の説明から始まった。研修は「学びの場」として提供され、その先の良い変化を期待して設計されるべき。そのために研修だけでなく、その前後も含めて全体をデザインすることが大切である。しかし現実には、そこまで整えられていない授業やシンポジウムなどを見かけることが多い。内容も肝要だが、それを支える準備が8割であることを理解していない人は多い。

何より大切なのは参加者中心であること。参加者の目線に立ってどんな時に違和感を覚えるのかを考慮して組み立てる。さらに、なぜその研修を行うのか、誰に何を持って帰ってもらいたいのかを常に念頭に置く。いつ・どこで・なにを・どうやってするのか、予算計画はどのようなのかを考えるのはその後でよい。研修の成果はその目的や研修に対して何を期待していたのかによって測ることが大切である。

世の中には「体験だけ学習」というものがある。例えば朝、学校を出発して現地に到着。稲刈り体験をしてすぐ帰り、そのまま下校する。事前の学習もふりかえりも行わない形だけの体験学習である。しかし、それでは学

びにはつながらない。学びを通して成長していくには体験だけでなく、指摘（何が起こったか）・分析（なぜ起こったか）・仮説化（次にどうするのか）というプロセスが必要である。ふりかえりを通して、さらなるステップに移行する。研修設計もそのようなサイクルを意識して考える必要がある。

2) 環境省で実施する人材育成事業の事例紹介

実際に環境省で実施している人材育成事業を題材に、研修を含めた事業の全体設計と、その検討内容について具体的に解説。事業のねらいやプログラムの内容など、企画段階でどのような話がされたのか、またそれがどう具体化されたのか、また、集合研修は2泊3日だが、事業を推進するためのチーム編成から、事前学習の方法（受講者に提供されたビデオ教材が紹介された）、その後のフォローまで、どの段階で何を実施したのか、具体的な内容が紹介された。

3) 研修で使えるアイディア・アイテム集

実施者が講演会やシンポジウムで行う「GCP アンケート（グー・チョキ・パーアンケート）」「PKT（ペチャクチャタイム）」「えんたくんミーティング」などのアイディアが紹介された。また、あえて設計をせず参加者の主体性に任せることもあるなど、応用の話もされた。参加者がすぐに持ち帰って活用できる実践的な内容で、活発な質疑応答や意見交換もされた。



【記録担当者】今田 海斗

公害の経験から考えるSDGs達成に向けた課題

実施者：栗本 知子(公害資料館ネットワーク／あおぞら財団)、尾山 優子(一般社団法人環境パートナーシップ会議)

【概要】

SDGsは、環境を守りつつ、経済を持続可能なものに変革し、公正で安定した社会をつくっていくために、様々な課題を根本から解決することを目指している。複雑に絡み合う課題を教育として統合的に取り上げるには、どのような工夫ができるか。本ワークショップでは、1960年代に激甚な大気汚染公害を体験した大阪・西淀川を素材としたロールプレイ教材を使い、「公害」という課題に直面した住民たちが、どのように行動したかを追体験した。

【実施内容】

まずは自己紹介と、アイスブレイク兼ねた「フォトランゲージ」。ペアで1枚の写真を観察し、何を伝えようとして撮影したのか、2人で推理し、キャプションを考えた。

日本が高度経済成長期のなか、全国各地で深刻な公害問題が発生。そのひとつ、西淀川大気汚染問題を例としたロールプレイ教材を体験した。西淀川大気汚染公害裁判の原告たちは、「手渡したいのは青い空」というキャッチフレーズを掲げ、全国から支援を受けて100万人署名運動を行った。

1) ワークショップ「5つの家族～西淀川の公害の経験から考える～」(90分)

町工場の経営者、公害でやむなく漁業から転業した家族など、様々な背景を持つ5つの家族にわかれた、計5組に分かれた。自分の役割を演じながら公害問題解決に向けて討論するロールプレイを体験した。討論のテーマは下記となる。

①日本が戦後、高度経済成長期

電化製品が登場し、人々の生活が豊かになってきた時代。日本各地に工場などができる。

②地域住民に異変が？

子どもを中心に喘息の患者が増加、地域住民のまぶたから銀粉、工場の横のアサガオが一晩で枯れる等、西淀川に住んでいる人に異変が起きる。

③大気汚染公害による子供の死

喘息を起こしていた子どもが亡くなり、工場の責任が疑われる。公害の町とレッテルが貼られる。

④裁判

公害撲滅のため、熱意を持って奮闘した1人の先生が工場に対して裁判を起こす。

2) ふりかえり

実施者より、SDGsの目標と照らし合わせながら、問題を統合的に捉えることの意義を解説。参加者はひとりずつSDGsの視点からロールプレイをふりかえり、気づいたことを共有した。役割を演じながら、その役割に共感したことや、共感できなかったこと、そしてその理由。「もちろん汚染物を排出した工場が悪いが、その経済発展による恩恵も受けていた」「最初は工場から出る煙が人に害を与えるとは分かっていなかった」とする、一方的に工場を悪者扱いするのではなく、話し合いで問題解決するべきという意見や、「国がもっと早く対処していればここまで大きな問題にならなかったのでは」といった意見が出された。

ロールプレイ教材によって自分事に落とし込みやすい。公害問題の教訓を現代の問題に生かし、被害者や住民の声を残さず、多様なステークホルダーによる協働が問題解決の鍵を握っていることを実感した。



【記録担当者】喜來 大智

災害支援と自然学校の役割

実施者: 高木 晴光(黒松内ぶなの森自然学校)、佐々木 豊志(一般社団法人くりこま高原自然学校)、
八木 和美(一般社団法人 RQ 災害教育センター)

【概要】

日本全国で自然災害が続いている。「その時！」私たちに何ができるか。そしてどのようなチカラがあるか。自然学校のノウハウやスキルを応用した災害支援の事例を提示しつつ、個人または自然学校として起こりうる未来への備えをイメージした。

【実施内容】

1) 活動例の紹介

自己紹介の後、実施者から災害支援の体験談の話がされた。

●高木 晴光 (黒松内ぶなの森自然学校)

2011年3月11日に起こった東日本大震災で、釜石での活動事例が紹介された。被災地では瓦礫の撤去、清掃活動を行う一方で、地域の人に寄り添った活動も積極的に行なっていた。テレビ、新聞などでは報道されない生の声を聴くこと、青空喫茶という被災者・地域の人々が気軽に立ち寄れる交流の場づくりなど。被災者やボランティアで訪れる人との交流する機会が増え、結果的に人、地域が元気を取り戻すことにつながった。

●八木 和美 (一般社団法人 RQ 災害教育センター)

東日本大震災での経験やノウハウを今後に活かすため、RQ 災害教育センター(以下、RQ)が設立。災害教育、防災教育の必要性が語られた。RQは自然学校の関係者が多いことから、自然学校のスキルがRQの特徴を形成している。自然体験活動で培った、危険地帯でも「自立・自己完結」で動けるスキル、被災者の一時受入れなど、日本各地の自然学校等とのネットワークが活躍した。

●佐々木 豊志 (一般社団法人くりこま高原自然学校)

2008年6月14日に起こった岩手宮城内陸地震での活動を基に紹介された。くりこま高原自然学校のある耕英地区も被災し、施設や畑などに大きな被害を受けたものの、1週間後には避難所にボランティアセンターを立ち上げ、耕英地区復興プロジェクトも発足した。3年後の東日本大震災では、放射線問題によって外で遊べない子どもたちのために、「手のひらに太陽の家プロジェクト」を運営。自然学校だからこそできるプログラム(川下り、米粉でパン作り)などを提供。子どもだけではなく、親御さんのストレスの軽減にもつながった。

2) もし、自分が災害に巻き込まれたら？

自分の地域で災害が発生したとき、自分に何ができるのか、何をすべきなのかを議論した。出された意見として、情報の一元化、先導者になる(旗を立てる)、拠点をつくるなどの意見が挙げられた。また災害発生前の準備が大切だということから、防災グッズ、避難場所の確認、自然学校同士のネットワークづくりが必要であるという意見も出された。



【記録担当者】吉村圭太

美しい棚田を未来につなぐ 11 年の環境教育の実践

実施者：永菅 裕一(NPO 法人棚田 LOVER's)

【概要】

お米を育て、生き物も多く、洪水調整につながる素晴らしい環境教育の場である「棚田」での 11 年間の実践を紹介し、意見交換を行った。棚田を再興し、NPO 法人の経営方法、人材の使い方やネットワーク、外部からのさまざまな支援などが紹介された。

【実施内容】

実施者から、下記の質問が参加者に出された。参加者は答えを紙に書き出し、ワークショップの所要所でやりとりを行った。

- ①ミーティング 1 日目で一番感動したこと自分の大切な人
- ②一番聞きたいこと、得て帰りたいこと
- ③一番力を入れていること、解決したい課題（よりよくしたいこと）

1) 自己紹介とアイスブレイク

所属と名前に合わせて、冒頭の質問①の答えを紹介した。参加者は 4 名。和気あいあいとした空気で始まった。

2) 当事者意識を持つ

冒頭の質問②について参加者一人ひとりが発表し、共有した。明文化することによって、参加者自身もワークショップ中にそのことを意識し、より棚田の未来について当事者意識を持って参加することが実施者としてのねらいだった。

また、冒頭の質問①自分の大切な人を想像した。もしその大切な人が、突然いなくなってしまうたら？ 現在、日本の棚田はあと 5 年でなくなってしまうとされている。実施者は「自分の大切な人」を棚田に置き換え、実施者にとってかけがえのない「棚田」への気持ちを共有した。

3) 実施者によるプレゼンテーション

棚田は生物多様性の保全、景観など自然や人の生活に役立っていることを紹介。一方で棚田を手放す人々のリアルな声、実施者が体験した獣害や自然の変化による被害などの厳しさ・難しさについても合わせて紹介された。実施者が愛してやまない棚田を取り巻く様々な状況や取組についてのプレゼンテーションがされた。

また、実施者は JAPAN OUTDOOR LEADERS AWARD 2017 のファイナリストとしての実績もある。外部からのさまざまな支援を得ることができ、人脈を広げることも活動の幅を広げることにつながっている。

4) 解決したい課題を考える

冒頭の質問③について参加者一人ひとりが発表し、実施者からのコメントや答えが返された。特に議論になったのが、組織と組織の相互理解の難しさである。実施者は 11 年の活動で培った法人経営のプロセスや人材の活かし方、資金調達をするためにどうやって理解をしてもらったか等を紹介した。同時に、自分が挫折してしまった時のことを持ち出し、どのように立ち直ったか、情熱をいかに持ち続けるかといった話もされた。お互いが理解し合うためには、まず相手の実態を知り、気持ちを考えて気遣いが重要である。現在、実施者がファイナリストとなったアワードや外部の支援が受けられる制度等は多くある。それをいかに利用し、どのようにアクションを起こしていくか、同時にそれらをどう運営していくか等、実践的な議論や意見が多くかわされた。

5) 棚田の恵みを味わう

参加者は、このワークショップを通して「特に学びになったこと」と「明日以降、具体的にしていきたいこと」を発表した。当たり前のことに感謝する、細部への気遣いの大切さなどが出された。

白熱したディスカッションのあとで、実施者の作った棚田米とお味噌汁、漬物を試食。棚田のすばらしさを頭だけでなく、五感でもあじわった。



【記録担当者】 檜垣 圭輝

ESDによる地域創生の可能性

実施者：増田 直広、阿部 治、小玉 敏也(一般社団法人日本環境教育学会／立教大学 ESD 研究所)

【概要】

日本環境教育学会＋立教大学 ESD 研究所とで実施したワークショップ。地域創生とは「住民1人ひとりが地域の多様な資源とかかわり地域との関係性を主体的に深めていくことで創り上げる、環境・経済・社会・文化のトータルな視点で持続可能かつ災害からの回復力（レジリエンス）が高い地域社会づくり」と言える。その地域創生にESDが貢献できるという考えに基づき、地域創生とESDの関係を俯瞰し、学校教育と自然学校が関わる事例を題材に、意見交換を行った。

【実施内容】

1) 実施者による報告

実施者3名による報告＋参加者同士の意見交換。

●阿部 治

ESDの概論（ESDとは何か、期待されている役割は何か）。また、水俣病など公害等の事例と環境教育のはじまりを解説し、ESDの可能性を確認した。明治以来、中央と地方の上下関係が強まるとともに多くの弊害が起きた。都市部、農山漁村問わず地域をどのように持続可能にできるか？ESDの果たすべき役割は大きい。

ESDは単に教育と限定せず、持続可能な社会づくりに関わる分野をつなぐ機能を持つ。地域創生で一番大切なことは誇りの回復であり、水俣の取組では地元学を通じて、水俣病で喪失した誇りを取り戻し、地域のつながりを再構築した。そういった点からESDは諸問題をつなぐ化・見える化する役割を持つ。小学校での学習が地域の核になる一方で、現状は小学校の統廃合が進んでいる。ESDを通じて学校の役割の再確認も必要となってきた。

●小玉 敏也

長野県飯田市遠山郷での事例から、ESDの可能性を紹介した。飯田市は2028年にリニア新幹線の開業を控えているが、現状は過疎化・高齢化が進んでいる。遠山郷は市内東部の中山間地域にあり、人口減少が地域の大きな課題となっている。遠山郷は、この状況下でSDGsの目標4「質の高い教育をみんなに」を実践している。

飯田市の教育施策では、遠山郷の教育を充実していく方針をとっており、重点的に質の高い教育を行っている。そのうちの

1校である上村小学校では複式学級やALTを入れての英語教育、iPadを使用してのICT教育や合唱の取組みを進めて、学校の魅力化を行っている。残りの2校も含めて、現在はユネスコスクールの加盟を目指している。地域の廃校が進むと、地域そのものの消滅につながるが、その背景には国の施策が影響していることも指摘したい。2002年から2013年の間に、全国で約5800校の小中学校と1000校の高校が廃校になっている。持続可能な社会づくりに向けて、学校が拠点となれば良い。その上でESDの果たせる役割は大きい。遠山郷の今後の展望は、飯田市内の小中高校へこの取組を波及させていくことにある。

●増田 直広

キープ協会を事例に、自然学校での学びを通じて地域創生につながる可能性を説明した。直近の調査によると、全国各地に約3700もの自然学校がある。自然学校は自然体験活動＋社会課題への取組みと貢献がその役割とされている。小田切（明治大学）は、人の空洞化が土地の空洞化につながり、それがむらの空洞化につながると述べており、深層では誇りの空洞化が大きな課題としている。前述2名の話にも合った通り、「誇り」の回復が地域創生のカギになっている。自然学校がこの誇りの再生に貢献できると考える。前述の遠山郷では、自然学校的な役割を果たす「地域おこし協力隊」が募集されており、地域づくりにおける自然学校の役割の大きさがうかがえる。

2) 参加者から一言ずつ（一部を掲載）

- ・変革はかなりつき抜けた人が主導しないと厳しいのかな、との印象を持った。
- ・大人と子どもをつなげる場、地元を知ることの大切さを感じた。
- ・学校教育での、文化的な視野も含めて誇りを持てることの大切さを感じた。
- ・地域づくりにおいて、中国と日本で同じところがある。
- ・地方を訪れると、うちには何もないとの声をよく聞く。でも、実際はキレイな水や山があって宝物ばかり。何もなくは無いのだ。お互いのニーズを見つけて、両者をつなげていくことが課題では。
- ・小規模校の取組みは、逆に最先端をいっていると感じた。

【記録担当者】 岡 明智

エコ・自然塾

実施者：道城 征央(道城エコ・自然塾)

【概要】

水中カメラマン／フォトジャーナリストの実施者による、世界自然遺産登録の背後に見える我が国の離島対策などについて講話を中心に進められた。題目は4つ。「サンゴ・サンゴ礁」「生態系・生物多様性」「ミクロネシア文化」「世界自然遺産(小笠原諸島)」。それぞれを実施者が撮った写真、動画を使ってビジュアル重視で紹介がされた。現在サンゴはどうなっているのか？生態系には無駄なものは無く、目に見えない部分で役立っているものがある、南太平洋の島嶼国で深刻化しているゴミ廃棄物問題が水没の要因、世界自然遺産登録の背後に見える我が国の離島対策などを解説した。

【実施内容】

自己紹介の後、実施者が撮った写真・動画を使って各テーマの紹介と、抱えている課題点が提示された。

1) 世界遺産の保全と経済発展：小笠原諸島

島の豊富な生物多様性が世界遺産に認定された、東京都の島。日本の排他的経済水域は世界で第6位の面積を持ち、陸地の面積は小さいが、海の面積を確保している。排他的経済水域や固有の自然を考えると、非常に重要な位置付けの島である。プレートの移動によって形成されている島であり、深海で行われる火山活動によって誕生した。日本が現在の形となる前の段階から存在していることがわかっている。陸地とつながっておらず孤立しているため、独自の自然形態、生物形態を作っているが、最近では外来種などによる生態系の破壊が問題となっている。

また、世界遺産に登録されたことから観光客が増加している。しかし日本国本土からの移動がフェリーしかないため、飛行場の設置が自治体の中で検討されている。グループに分かれ、「小笠原諸島に飛行場は必要か？」というテーマでディスカッションを行った。

賛成意見では医療面でも本島に早く急病患者を送

ることができる。利便性が良くなる。物資などは手に入りにくいものもあり、情報なども手になる。経済的にも観光客の増加が期待されているので、お金が生まれ経済的に豊かになる。反対意見は人がたくさん入ってくることにより自然破壊や今までは小笠原諸島に行けない場所としてあったが、行けないという価値が壊れると言った意見があった。

2) 文化とゴミ問題：ミクロネシア諸島

太平洋の島々では、様々な民族が暮らしている。地球温暖化や太平洋プレートの影響で、島が沈んでしまうことが懸念されている。同時に、第二次世界大戦や過去の戦争で様々な国の統治下に置かれた歴史があり、海外の文化が混在している。日本もそのひとつで、日本人の名前や文化、コミュニティ社会と自然崇拝の姿勢も残っている。実施者は現地のゴミ問題に焦点を当てて取材。「ごみ」という概念がない現地にとって、その場に捨てれば自然に戻るのが常識であり、海外からペットボトルなどの製品が入ってくことで、「ポイ捨て」の問題が起きている。実施者は現地の短大生を集め、ゴミ拾いのボランティアを実施した。

参加者はグループに分かれ、「保守的になっていい面／悪い面」「革命的になっていい面／悪い面」でディスカッションを行った。



【記録担当者】杭田 広人

野外フェス×環境教育の可能性をさぐる作戦会議

実施者: 村上 友和(株式会社自然教育研究センター)、松尾 貴史(ホールアース自然学校)

笠倉 秀貴(NPO 法人国際自然大学校)、新津 裕(岐阜県立森林文化アカデミー)

【概要】

野外フェスティバルは、はじめてキャンプをしたり、レインウェアを着て雨の中を歩いたり、今や多くの人にとってアウトドアの入口になっている。近頃は子ども連れで参加する人も少なくない。自然体験、環境教育にとって絶好のフィールドであり、たくさんの人がより自然に近づくチャンスだ。

本ワークショップでは、自然学校によるフェスでの取組の事例を紹介するとともに、フェスにおける自然体験、環境教育の可能性を考えた。

【実施内容】

テーマは「よりたくさんの人に自然体験の機会を」。誰でも参加しやすい野外フェスと環境教育のつながりを過去の実例とともに紹介し、2019年4月に予定している「GO OUT JAMBOREE キッズフィールド」のコンテンツの骨格案を出し合った。参加者の野外フェス参加経験は半々だった。

1) 過去事例の紹介

自然や環境に関する取り組みが行われている野外フェスとして、下記が紹介された。

- ・鹿児島県桜島で満員を動員した THE GREAT SATSUMA NIAN FESTIVAL2018
 - ・ソーラーパネルを用いた、岐阜県の中津川 THE SOLARBUDOKAN
 - ・マーケットが特徴的な愛知の森、道、市場
 - ・ワークショップの数日本一と言われる山梨県の道志村キャンプ NaturalHigh!
 - ・山梨県八ヶ岳の Hi!LIFE 絶景音楽フェス
- キッズコーナーやクラフトワークショップなど、子どもから大人まで遊びながら自然にふれられるコンテンツや、ソーラー発電など環境に配慮した取組みが展開されている。

2) フェス出展内容のディスカッション

「来年、自分がフェスに出展するなら何をする？」のお題で意見を出し合った。

アクセサリ作り、解体ワークショップ、自然ビンゴ、葉っぱで変身、楽器をつくる、間伐体験、PET ボトルランタン、自然のもので絵を描く、お面をつくる、ナイトハイク、葉っぱスタンプ、森のアロマづくり、マイナス1体験、焚き火でポップコーン、カン缶タワー、竹クラフト、自然の音集め、秘密基地、火起こし体験、自然ポイントラリー、木っ端ドミノ、クイズ、エアガン狩り、積み木、リュックに何を入れるか、地元の紙づくり・水産業、顕微鏡で見てみよう、川の音の聴き比べ、山の音、キャンプの音を詳しく聞いてみる...等、多くの案が出された。

出された案をもとにさらにディスカッションし、2つの案を組み合わせるなど、意見交換は白熱した。

音楽は誰でも親しみを感じ、人が集まる力を持つ。音楽フェスを環境について考えるきっかけとして、関係人口を増やす可能性を参加者は感じていた。今回出されたたくさんの案の中から、実際に、GO OUT JAMBOREE2019 に採用されるものがあるかもしれない。



【記録担当者】伊東 夏寿

フルスイングの発酵ワークショップ

実施者: 田村 陽至(ドリアン)

【概要】

グルテンを消化できない人も食べられるパン。牛乳でお腹グルグルなる人も食べられるヨーグルト。本当はいとも簡単にできる、自然派ワインやシードル。そんな発酵話を交えつつ、ヨーグルト作りを体験した。

【実施内容】

「なぜ発酵食品は生み出されたのか?」「発酵と聞いて思い浮かべる菌は?」という問いかけから始まった。牛乳など、人体に消化がされにくい食品を食べやすくするのが発酵である。その発酵を促すのが菌であり、酵母菌・麹菌・乳酸菌・納豆菌について、それぞれキャラクターを用いて解説した。酵母菌は自分の身を守れないお姫様、または誰かの力を借りながらでないと力が発揮できないことから豊臣秀吉。乳酸菌はどんな菌にでも勝てることから王子様や、織田信長。参加者からはたびたび笑いが起こった。

今のパンの主流は酵母菌を使ったパン。昔ながらのパンは乳酸菌で作られていたため、しっかり分解・発酵がされていたが、酵母菌のパンはグルテンを分解できない。消化がされにくいまま、人によってはお腹の調子が悪くなるなどの影響が出てしまう。これはパン以外の発酵食品にも言える。

また、発酵食品の特性にも触れた。発酵食品を作るためには菌とその栄養になるもの、そして菌に合う温度が大切である。条件が揃えば勝手に発酵が進み、発酵食品ができる。管理に気を付ければ、永遠に発酵食品を作ること

ができる。

発酵の仕組みの解説があった後、ヨーグルト作りに挑戦。45℃に温めた牛乳に、1/10 量のヨーグルトを入れ、しっかり混ぜ入れる。30~40℃に保温して、時間がたてばヨーグルトになる。牛乳を 45℃に調整するのに苦戦していたが、自作のヨーグルトの完成が待ち遠しい様子だった。



【記録担当者】関根 瑞希

WS16:体験型ワークショップ・②(90分)

読本「森里川海大好き！」を活かした環境教育へ

実施者: 奥田 直久(環境省つなげよう、支えよう、森里川海 プロジェクトチーム)

【概要】

「森里川海大好き！」編集委員会(養老孟司委員長)により、児童文学作家の阿部夏丸さん書下ろし作品「大発見は足下に」をメインにした「森里川海大好き！」読本が発刊された。この本は、森里川海で元気に遊ぶ子どもを復活させるため、子どもたちが自然の面白さに気づき、自然体験に関心を持つ契機となるよう作成したもの。この本をもとに家庭や学校、地域社会において、本物の自然の中で子どもたちに遊んでもらう仕組みと仕掛けを考えた。

【実施内容】

参加者の自己紹介の後、読本「森里川海大好き！」の制作の背景とねらいを共有した。本来、子どもは自然体験を通じて複雑な人間関係で生きる術を学ぶ。しかし現在、子どもの自然体験の減少が懸念されている。そこで保護者や教育関係者に向け、森里川海の繋がり、子どもの自然体験の重要性を伝えるため、子どもたちに向けても自然の繋がりや面白さを伝えることを目指す。

参加者で読本の抜粋を読み、感想をグループ、全体で共有した。「様々な生物が登場していてよかった」「自分は自然体験の楽しさを広める活動を行っているので胸にキュンときた」と肯定的な意見もあれば、「冒険系の男子しか出ない物語は、女子にあまり響かない」など課題点も出た。学校教員の参加者からは、「教科書にはない知識ばかりで、自然体験活動や読書の時間に使える。しかし学習指導要領に則って制作していないため、一からこの読本を使った授業を考えな

ければならず、使いにくい」。

それらの意見を踏まえ、「読本が自然への誘いへのきっかけになるか」「どのような使い方が考えられるか、また発展させるには」をグループで話し合った。どのグループも活発な議論が行われていた。意見・アイデアは全体で共有した。

自然体験の前後に用いれば自然への誘いのきっかけになる。また、子どもが親しみやすいキャラクターをおくことで読みやすくなるのではというアイデアも出された。使い方については、「登場する生物に焦点を当てて調べる」「読書感想文を書いてもらう」「夏休みの体験と照らし合わせてみる」等が出た。今後の発展のためには、活字だけではイメージの限界がある。紙芝居・絵本・映像・演劇等に活用する方法も提案された。



【記録担当者】元安 遥親

森カフェ GEMS マタギさんと算数-自然の恵み山御膳

実施者: 谷口 哲郎(NPO 法人つがる野自然学校)、柴原 みどり、鴨川 光(ジャパン GEMS センター)

【概要】

白神の森に分け入ると春夏秋冬、様々な山の恵みを授かる。そこに暮らすマタギさんから、山の恵みとお手紙をいただいた…という設定で、白神の恵みを使った山御膳を作った。焚き火を囲んで、「GEMS(科学と数学の体験型プログラム)」に代表される環境教育プログラムを活用し、地域の食文化や森林生態系の保全、持続可能な自然資源の管理について考えた。

【実施内容】

参加者は4人1組のグループに分かれ、自己紹介。実施者から白神山地とマタギさんの説明がされた。

白神山地では、カジカ、イワナ、ヤマメなどの川魚や、マイタケなどのキノコや山菜や熊といった山の幸やそば、目屋豆腐が有名である。その中から、根曲がり竹、とうふ、きのこ、山菜、そばの5つから3つの食材を選び、おいしい自然の恵み汁を作るには、いくつかの組み合わせができるかを考えた。数列を使用するグループ、好きな組み合わせを先に考えてから答えを導き出すグループ、やり方は様々だった。

その中からおすすめの組み合わせを1つ決め、いくらで売れるかを議論した。食材を買う、取る、もらうなど入手方法を考慮し、食材の価値や手間などを相談しながら、値段を決めた。

値段とその理由をグループごとに発表したあと、実施者の解説が入った。体験したのはGEMSプログラムの1つ「食べ物で算数」。学校で学んだ「算数」が、実際の場面で活かせる実感を持ってもらうためのプログラムであり、日常には様々なかたちで算数が存在することに気づく。前半は組み合わせを考える

「答えのある算数」、後半はいくらで売れるかを決める「答えのない算数」を体験した。

最後は外に出て焚火を囲み、白神山地のきのこ汁と熊鍋をいただいた。現在、プログラミング教育の取り入れなどとも言われているが、プログラミングそのものではなく思考として取り入れるかたちは様々ある。テストの点数だけではなく、算数的な感覚や考え方を大切にする体験学習について話がされた。



【記録担当者】鈴木 淳太

WS18:体験型ワークショップ・②(90分)

歌の力、体感ワークショップ

実施者: 中野 民夫(東京工業大学)

【概要】

からだ、心、頭、直観、いろんな要素を持つ人間の全人的な成長を目指すとき、音楽の持つ力は欠かせない。実施者のシンプルで味わい深い？オリジナルソングをネタに、一緒に歌ったり、対話したりして、歌の力を体感するライブ&トークの試み。

【実施内容】

実施者と参加者が輪になって座り、実施者のギターに合わせ歌うことを中心にワークショップが進められた。

まずは自己紹介。今活動していることや清里ミーティングでの気づきなどを共有した。また、なぜこのワークショップに来たのか、歌に関して思うことなどについても話した。参加者からは「音楽には人を一つにする力がある」という意見が多く出された。

2人組になり、スイスの民謡「おおブレネリ」を歌った。歌詞を自分に当てはめた替え歌で、お互いを理解した。声を出したことによって参加者の緊張がほぐれ、一気に会場の空気が柔らかくなった。実施者のオリジナルソングを2曲歌ったところで、3人のグループにわかれ「忙しい時どのように向き合うか」のお題でディスカッションが行われた。参加者からは、「発散する」「よりどころに戻る」などの意見が出た。実施者から提案されたのは「マインドフルネス」。今、ここを知るために呼吸に集中し、雑念や不安を取り除き、精神的に安定した状態を作るという

もの。参加者はひとりひとり自分自身と向き合っており、ゆったりとした豊かな時間が流れた。

それから、実施者の経験をもとに作曲されたオリジナルソングが3曲紹介された。1曲ずつ作曲秘話やその歌に込められた思いの紹介の後、実施者のギターに合わせて全員で歌った。参加者は歌に込められた思いを知り、1つひとつの歌詞を丁寧に歌っていた。

シンプルでありながらも鋭い歌詞を通し、参加者は自分自身と向き合い、また社会の根源的な問題にも目を向け、今回のワークショップのねらいである音楽の力を体感した。



【記録担当者】大浦 裕美子

UNCO ゲーム開発のためのβ版体験ワークショップ

実施者: 長谷川 潤・盛 忠亮(NPO 法人イクメンクラブ)、奥宮 健太(BEANS BEE)

【概要】

2018年の清里ミーティングで出会った、長崎のウンコロジスト・福藺恵子さん(ビデオ出演)、千葉の環境カードゲームクリエイター・奥宮健太さん、イクメンクラブの三者が、悩みながら開発を進めている「UNCO(未確認自然循環物体)ゲーム」のβ版を体験。環境カードゲームの楽しさをまずは味わいながら、ウンコを身近に感じてもらうための壮大な(!?)プロジェクトに、参加者の知恵やアイディアを取り込んだ。

【実施内容】

UNCO(Unidentified Natural Cycling Object: 未確認自然循環物体)ゲーム開発の経緯が紹介された。2018年の清里ミーティングで福藺恵子さん(ウンコロジスト)と出会い、UNCOの面白さをもっと広めるべくゲーム作成の活動が始動した。現代の子どもはデジタルゲームに夢中になりすぎていることを問題視し、「3DSに負けないカードゲームを」という目標を掲げた。ゲームの開発のための会議を何度も行い、試行錯誤しながらも、3つのゲームが形になった。今回はその試作カードゲームを体験し、意見やアドバイスからよりよいものに作り上げることをねらいとしている。

まず、すでに発売されている環境学習カードゲーム「どうぶつの里」を体験。食物連鎖がテーマとなっている。カードゲームの感覚をつかんだから、UNCOゲームの体験に移った。

「フンになりきり、土に還る」がゴールのすごろくゲーム。生き物のカードを使った神経衰弱ゲーム。森の循環を学ぶカードゲームの3種を体験した。

最後に、UNCOゲームを体験した上での感想やよりよくするためのアドバイス等について、えんたくんを用いて議論した。「うんこである必要性をあまり感じなかった」「もっとうんこを前面に出していくべき」など、楽しみなながらも、真剣に意見交換を行った。



【記録担当者】 新田 美優

WS20:体験型ワークショップ・②(90分)

教員向けエコ×エネ体験ツアーの手応えと可能性

実施者: 藤木 勇光(電源開発株式会社(J-POWER))

【概要】

J-POWERでは、10月末に教員向けのエコ×エネ体験ツアーを開催した。本ワークショップではツアーの実施内容や手応え、アンケートの結果を紹介。環境教育やエネルギー教育に取り組む我々が、実際の学校教育の現場とどのように協働できるのか。ツアーで見えてきたことを題材に、教育現場との協働や、そのための智恵や工夫について、意見交換を行った。

【実施内容】

J-POWERでは、「エコとエネ(エネルギー)の両立した社会をめざす」をテーマとした体験ツアーを開催している。エネルギーと環境のつながり、バランスのあり方などを気楽に、真面目な対話を通じて学びあうことが目的。今回は教員向けに実施したツアーが題材とされた。ツアー計画の動機、ねらい、実施概要の解説、手応えと気づきが紹介された。学校教員に対する理解が深まったこと、プログラム構成の改善の必要性が今後の課題となる。

ツアーの紹介と解説をもとに、グループでディスカッションが行われた。参加者の中には自身が教員という方や、実施者と同様にエネルギー関連の仕事をしている方もおり、議論が白熱した。教員向けエコ×エネツアーの課題は、参加した先生方が体験した内容を学校の指導要領にどう組み込むか。学校教育の現場では、指導要領に沿った授業をしなければならない。今後のプログラム構成に気を配る必要がある。一方で、「このツアーを授業にどう生かす

か」を強く考えすぎて、自身が「発見」を得られない教員がいたり、本末転倒になってしまう。また、子ども向けに工場見学の案内をしている参加者からは、学びに来た子どもたちに「自分たちがエネルギーを使っている当事者なのだ」という意識を持ってほしい一方、昨今ではIH化が進む世の中ではメッセージを伝えにくくなっているという。エネルギーと私たちの付き合い方、またその必要性の伝え方についての課題が議論された。



【記録担当者】 江端 聡

WS21:体験型ワークショップ・②(90分)

森で元気に！キープの『森林療法』ちょこっと体験☆

実施者：小野 明子(公益財団法人キープ協会)

【概要】

キープ協会では、これまで様々な形で森林療法に取り組んできた。1泊2日の宿泊型プログラム「森療時間」や日帰りプログラム「森のやすみじかん」、講演会などの主催のほか、最近では受託プログラムとしてもリフレッシュやリラックスを目的とした「森林療法」のオーダーを受けることも多くなっている。

今回はキープ協会が行っている「森林療法プログラム」を実際に体験。また、体験後には、キープ協会の考える「森林療法プログラム」や、そのポイントについても、短くではあるが解説を行った。

【実施内容】

八ヶ岳自然ふれあいセンターを出発して、まず見つけたのはモミの木。トゲトゲした葉を握った感触、緑色の葉と枯れた茶色い葉の香りの違いを楽しんだ。続いて、広い原っぱにて森へ入る前の準備体操。「息を吸うときに、足裏から大地の力を吸うイメージで」実施者の声掛けで、何度も深呼吸をし、目を閉じる。「体をセンサーにして」太陽や風、匂い、音がする方向に顔を向けて体の感覚を意識する時間を持った。

自分自身の五感へ目を向けた後は、いよいよ森の中へ。呼吸と歩きのリズムを合わせたり、森の風音を聴き牧草地との違いを比べたり、ペアで自然物を集め、色がグラデーションになるよう並べたり。森の中では、一人でシートを敷いて横になり、静かな時間も過ごした。たった5分ほどだったが、

参加者はもっと長く感じた様子だった。眺めのよいテラスでは夕日に照らされた富士山とお月様の景色を使って、森のカクテル作り。カクテルグラスに見立てたカードを景色にかざすと、思い思いの色合いがグラスに入り込んだ。

その後は、ふれあいセンターに戻り、清里に生えているササで作ったお茶を味わいながら、森林療法のふりかえりについて、短く解説が行われた。ササ茶は意外と美味しいと好評！参加者は自然から受け取る癒しの時間を満喫した様子だった。



【記録担当者】 岡 明智

WS22:体験型ワークショップ・②(90分)

ハラオチ納得！ジオガシキッチン教室

実施者：鈴木 美智子(ジオガシ旅行団)

【概要】

「風景を切り取ってお菓子里にします」をテーマに活動するジオガシ旅行団による、大地を楽しむワークショップ。全国各地で開催しているジオガシキッチン教室を簡易バージョンで体験。「ジオ菓子®」の持つ機能と役割、目的の解説と共に、お菓子を作った。

【実施内容】

ジオガシキッチン教室は、「食べる」という体験を通じ、ジオ(大地)の成り立ちや身近な景色に興味を持ってもらうための「座学」+「実習」の複合プログラム。子どもたちを主な対象として、伊豆半島内外の小学校や各種団体向けに行っている。今回はスコリア(溶岩)作りを体験した。

本物のスコリアと、ジオ菓子のスコリアを見比べた。見た目では区別がつかない。スコリアができる過程をカaramel焼き(飴を発泡させた砂糖菓子)で体験した。まず、火にかけてと気泡が現れる。その気泡も、本物とジオ菓子はよく似ている。材料は水、砂糖、重曹の基本的なものに、ココアパウダーとごまを追加する。そうすることで、見た目がより本物に近づいた。また、マグマが噴出する「噴火」の再現として、コーラ(炭酸飲料)にメントスを入れ、噴火が起こる原理を学んだ。

甘いものはみんなを笑顔にするチカラがある。お菓子の甘い誘惑と共に、面白おかしくジオについて学んでもらう

ことが、ジオ菓子の目的。袋にはお菓子のモチーフとなった岩や地形の写真と地図、説明が載った紙を入れている。

現代の防災教育は、災害が起こったらどうするか、起こった時のためにどんな準備をするかを教えられる。実施者は、それでは未来に繋がらないと考えている。地形の成り立ちや、なぜそれが起こるのかを学ぶことで、次世代の子どもたちに繋がる未来のバトンとなる。ジオ菓子はそのきっかけだ。和菓子にも、景色を見立てる要素を含んでいる。和菓子とジオ菓子の違いは、「作る工程にも地理的要素が含まれていること」である。



【記録担当者】 檜垣 圭輝

WS23:体験型ワークショップ・②(90分)

「地域を活かした教育力」

実施者：大西 かおり(NPO 法人大杉谷自然学校)

【概要】

三重県大台町(一級河川宮川の上中流域の中山間地)に残る地域の古いものや、自然物を使って地域に残る教育力を学ぶ参加型体験を行った。

【実施内容】

大きく2つのゲームを通して、楽しみながら歴史の理解を深めた。初めに行ったのは、「今昔神経衰弱」。実施者が持参した様々なモノを並べ、関連しているものをペアにする。

「靴」と「わらじ」、「殺虫剤」と「蚊取り線香」など、使われていた年代は異なるが使用目的が同じである。今と昔の製品を改めて観察し、循環型社会の正しい在り方を考えさせることがねらいである。参加者は「昔の製品は土に入れたら分解されるが、今の製品は分解されない」や「昔の製品は自然の素材を活用している」、「昔の製品は自分の生活にあったものが作れる」などの意見を出した。循環型社会には昔の製品が良いが、今の製品の安さや便利さ、早さなどから戻れない気持ちもある。昔の製品に戻るには、多少不便でも受け入れられる心の余裕が大切だ。

次に行ったのは「レッツゴー3人」。本や写真、道具など様々なアイテムの中から、見た目だけではなく歴史も考えながら、関連性を見つける。複雑な組み合わせのものが多く、実施者がヒントを出しながら進められた。思いがけない共通

点に、参加者は驚いた表情をしていた。

最後に実施者から、大杉谷自然学校を紹介。自然との距離が遠くなってしまった子どもたちに、自然体験の場を提供している。参加する子どもは、三重県内の都会の子どもが多い。自然は人間の都合を考慮してはくれない。自分の思うようにいかない体験をすることで、心の柔軟さや忍耐力、想像力、感謝の心などがはぐくまれる。今回行ったゲームで地域の歴史を伝えるとともに、その地域が持つものは子どもたちを育む力(=教育力)を持っている。



【記録担当者】 米山 功一

WS24:体験型ワークショップ・②(90分)

「九州・沖縄で暮らし続ける！」地域に根ざす SDGs

実施者：浜本 奈鼓(NPO 法人くすの木自然館、九州環境教育ミーティング代表)

山内 一平(九州地方環境パートナーシップオフィス・EPO 九州)

【概要】

1997年に大分県で始まった久住高原環境教育ミーティングは、2000年に九州環境教育ミーティング(KEEM)に発展し、2019年に23回目を迎える。なぜ、九州では一度も途切れることなく、ミーティングが続いてきたのか。また、KEEMの連携パートナーであるEPO九州では、九州・沖縄や島しょ地域におけるESD推進にも取り組んでいる。KEEMの歩みや九州・沖縄における持続可能な地域づくり・島づくりの活動を紹介した。

【実施内容】

丸く円になって座り、和やかな雰囲気の中、ひとりひとりの自己紹介タイムからはじまった。九州出身の方や実際に現在九州で活動している方など、九州に深い関わりや繋がりをもつ方が多く集まった様子。

実施者から①九州環境教育ミーティング(KEEM)の歩み、②EPO九州の取り組みについて、SDGsとの関連性や団体の活動の変遷、取組みなどが紹介された。

14年前、荒れに荒れていた鹿児島県重富海岸。なんとかしたいと立ち上がった集落の人々による、長年にわたるゴミ拾い活動や行政への働きかけで、重富海岸は国立公園となり、現在では「かごしま景観学習」として、重富海岸をベースに小学生、中学生、大学生にむけた環境教育も実施している。「住民の心が離れていった海岸を、地域の人たちがネットワークをつくって蘇らせていった」という実施者の言葉が印象的だった。

最後に、参加者からの質問に実施者が答えるかたちで、議論が行われた。「閉鎖的になりがちな島の内外の人が繋がるにはどうしたらよいか」、「手付かずの竹林についてどうしたらよいか」など、実践から生まれた課題について尋ねるものが多かった。実施者は自らの取組みの理由に、「みんな自分たちのふるさとがすきだから」と言う。島であれば、何の情報で何を切り口に外の人と繋がりたいか、を考える。また、企業とともに竹林をチップなどに商品化したり、大学の研究に使ってもらったり、あるいは建築資材として利用したりなど多様な切り口で竹林整備も行なっている。様々なステークホルダーと繋がることが重要だ。



【記録担当者】 村山 かよこ

早朝ワークショップ（60 分）

◆ロシアからの旅人と再会しよう

実施者：安西 英明（公益財団法人日本野鳥の会）

寒い清里の朝 7 時「ロシアからの旅人と再会しよう」と 14 人が集合した。地衣類を使ったエナガの巣、ツグミの名前の由来、ハシブトガラスとハシボソガラスの鳴き方の違いなどの解説が入りながら、清泉寮周辺の鳥たちを観察した。鳥の羽に水をかけてその揮発性に驚き、実施者の巧みな話に、楽しい時間を過ごした。



◆ヨーガと瞑想

実施者：中野 民夫（国立大学法人東京工業大学）

朝の気持ちのよい時間に、身体を、呼吸を、心を整えるワークショップ。まずは冷えてしまっている体を各々ストレッチでゆっくりほぐす。スタートは実施者から呼吸法の指導。実施者の声に合わせてポーズを変えながら、硬くなった体を伸ばす。届きたいところに届かない手や足を気にしていると「大事なことは人と自分を比べないこと。自分の身体に耳を傾けて」。自分の内に“気”を向けることができ、とても充実した時間となった。



◆山珊瑚で根付を作ってみましょう

実施者：小林 伊久子（バジリコ）

山珊瑚は、名前の示すように山で採れる珊瑚。昔、ヒマラヤが海だった頃の珊瑚が化石となって、ネパール方面の地表に現れたもの。その山珊瑚で赤くて可愛い、オリジナルの根付を制作した。

大地の長い歴史を感じるワークショップとなった。



◆清里朝散歩♪

実施者：岡 明智（キープ協会実習生）

主の木と呼ばれる立派な木を目指して、のんびり秋の清里の朝を感じながら散歩した。少し風もあったが、参加者の方はしっかり防寒をし、スタッフからペットボトル湯たんぽが配布されたため、特に寒さは問題なかったと感じた。主の木に向かう道中では、アクティビティなどを行わなかったため、より一層、太陽の温もり、枯葉を踏んだ音など自然の魅力を感じることができた。主の木に到着すると、木をじっと眺める人、木に抱きつく人などそれぞれの反応があり、主の木からエネルギーを貰えているような神秘的な雰囲気を感じる時間となった。



◆SDGs に対する違和感を語ろう

実施者：森 雅浩（Be-Nature School/ 有限会社ビーネイチャー）

SDGs に抱える「違和感」を語り合い、疑問をぶつけあうワークショップ。なるべく異なる世代で議論ができるようにペアを組み、それぞれが SDGs に感じている「違和感」について語り合った。ペア替えを行い、同様の対話のあと、自分のなかにある違和感を言葉にして紙に書き出した。挙げられたのは「SDGs のゴールがボヤけている」「清里ミーティングで得た SDGs の考え・経験を、どう地域に持って帰るか」「古い体制から本当の革新が生まれるのだろうか」「若者へのアプローチはどうなっているのか」などがあった。これらの意見について、疑問をぶつけ合った。

【記録担当者】珠村 智



◆ロールプレイ教材体験！！「三丁目の（煙でかすむ…）夕陽@西淀川」

実施者：栗本 知子（公益財団法人公害地域再生センター（あおぞら財団））

尾山 優子（一般社団法人環境パートナーシップ会議）

「テレビが家に来た！」と盛り上がっていた、日本が元気だったあの頃。一方で 1968 年の大阪市西淀川では、大気汚染の公害が起きていた。参加者は住人（工場経営者から教師、市民など）になりきるロールプレイで進めるゲームを行った。次々に健康被害を訴えてゆく住民たち。中には命を失ってしまうことも。公害問題の起こりから解決までの流れを体験した。

異なる立場の役になりきることで、考えることも感じることも異なってくる。最後にそれを共有することで被害者の立場だけではなく、加害者の立場も考えた。

【記録担当者】今田 海斗



◆「UNCO」ゲームを考える！

実施者：長谷川 潤・盛 忠堯（NPO 法人イクメンクラブ）、奥宮 健太（BEANS BEE）

実施者が開発中の UNCO（Unidentified Natural Cycling Object：未確認自然循環物体）ゲームを体験し、改善点を議論した。

「うんこ→土」、「神経衰弱」、「サイクル」の 3 種類のゲームを体験。それぞれの改善点や、もっと盛り上がるための追加ルールなどを参加者同士で意見を出し合った。ゲームは 2 つのチームそれぞれで行われたが、どちらもとても盛り上がって笑い声がたびたび上がりつつ、真剣な駆け引きが行われていた。

【記録担当者】関根 瑞希



◆なんとかしたい！自然体験環境教育のあんなコトこんなコト

実施者：村上 友和（株式会社自然教育センター）

4～5人の3グループに分かれ、環境教育について思っているもやもやとした感情を書き出した。それら貼り出し、グルーピング。たくさんの悩みが登場したが、そのなかでも「教育」「お金」「自然体験その後」という大きく3つのキーワードに絞り、それぞれをテーマに、グループに分かれた。

学校現場との乖離、ビジネスの視点、非日常から日常に自然体験イベントでの経験がいきるにはどうするか、等々の議論がかわされた。

【記録担当者】珠村 智



◆教員免許更新講習×自然学校

実施者：川嶋 直（公益社団法人日本環境教育フォーラム）、中野 民夫（東京工業大学/JEEF 理事）

JEEFが2018年度（8月）に開催を始めた教員免許更新講習では、ABD（アクティブブックダイアログ）やKP法（紙芝居プレゼンテーション）そして、えんたくんミーティングの体験的講習を行った。講習の内容の紹介があったあと、「これから全国の自然学校で講習を開催するためには」というテーマでその可能性を議論した。

参加者からは、教員に自然学校での講習を選んでもらうためには、クラフトや料理といった堅苦しくない参加型のものは好まれるのではという意見が出ていた。

【記録担当者】村山 かよこ



◆意識が低い人が学ぶ SDGs

実施者：野田 智裕（トヨタの森）

「意識ない系男子の実施者が、SDGsを参加者に教えてもらう」ことを目的にしたワークショップ。関心の低い人への伝え方を実践し、自分にできることを考えることがねらい。そもそも意識が低い人とはどういう人か、自由な討論会となった。議論の結果、「環境教育に対しての思いはあるが、活動はしておらず他人事のように感じてしまう人」がこの場での「意識の低い人」となった。まずはSDGsを自分の問題として捉え、身近なことがSDGsにつながっていると知ってもらうことが第一歩。各自が、SDGsをどのように捉えているか、逆に腑に落ちない点はどこか、どうしたら自分事に思えるのかを議論した。

【記録担当者】米山 功一



◆先祖からの贈り物を収穫する

実施者：八木 和美（一般社団法人 RQ 災害教育センター）

柴原 みどり（公益社団法人日本環境教育フォーラム）

身体を動かし、時間をはるか昔までさかのぼり、私たちの先祖からの贈り物（ギフト）を収穫する。ジョアンナ・メイシーの「つながりを取り戻すワーク」のひとつを日本語バージョンにしたもの。

大人から子どもへと自分の過去をさかのぼり、さらに、母親のおなかの中から幾世代もの時代を、遺伝子を通じて人類発祥の地まで戻ったあと、ゆっくりと現代まで戻ってくる。その間に、自然・大地・地球の恵みなど先祖たちが手に入れた知恵や勇気を思い出していく。人の本来のあり方や価値観を訴えるような語りかけと音楽に耳を傾けながら、ギフトのイメージをポーズで表す。自分の中で起こった変化や感じたことを書き出し、これをこれからどう使っていくか話し合った。

【記録担当者】鈴木 淳太



ポスターセッション

参加者がそれぞれ自分の活動について発表し、お互いの活動や目指す方向性について知り合う時間。発表者にはA1（縦）×1枚分のスペースが割り当てられ、そこへポスターやチラシ等を自由に貼り出し、参加者・参加団体の活動報告や話題提供、PRなどを発表した。

発表には170cm×70cmのダンボール3枚で三角柱をつくる「さんかくん」を使い、同時多発的にポスター発表を行った。予め用意したポスターを貼る、KP法で話をする等、発表者の発表スタイルも自由。時間は区切らず、発表者と聞き手が自由に動き回り、その場で活発な意見交換が行われていた。

また、事前申し込み分だけではなく、発表を行いたくなった人がその場で発表側に回れるよう、白紙の模造紙を貼っただけのスペースを用意したところ、そこで発表者にまわる参加者も見受けられた。



閉会式

司会・閉会挨拶：公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF） 理事長 川嶋 直

3日間の全プログラムが終了した。最後に、JEEF 理事長・川嶋直より閉会の挨拶と来年度の開催日程の発表があった後、全体会3で参加者の言葉がたくさん書き込まれたロール紙の上で記念写真をとって、清里ミーティング2018は終了した。



オプション

◆協賛企業ブース

清里ミーティングへご協賛いただいた企業様の紹介ブースを設置。



◆自由配布コーナー

参加者が自由にチラシやパンフレットを設置できるコーナーを設けた。



◆顔写真名簿

参加者が会いたい人を探せるよう、全参加者の顔写真を掲示。夜の情報交換会では、JEEF 理事が会いたい人を紹介してくれるコンシェルジュデスクを設けた。



◆リクルートコーナー

求人情報・求職情報を自由に貼り出せるコーナーを設置し、夜の情報交換会ではマッチングタイムを設けた。



◆フォーラムショップ

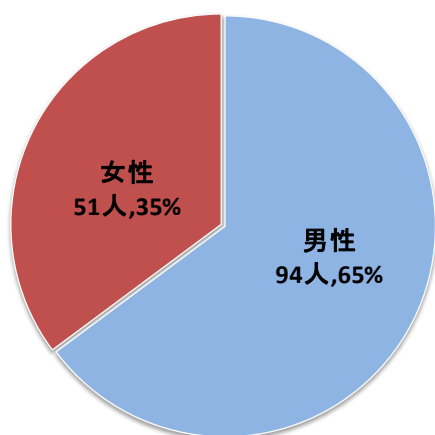
環境教育に関する教材・図書、グッズなどの販売が行われた。



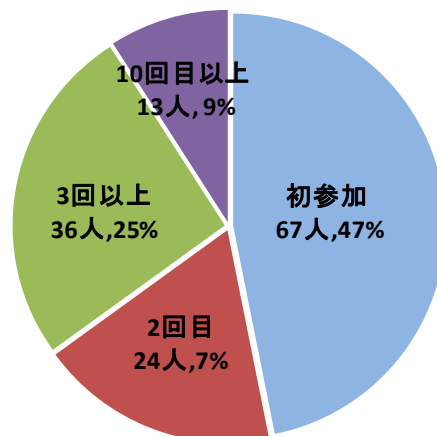
参加者データ

～データに見る清里ミーティング 2018～

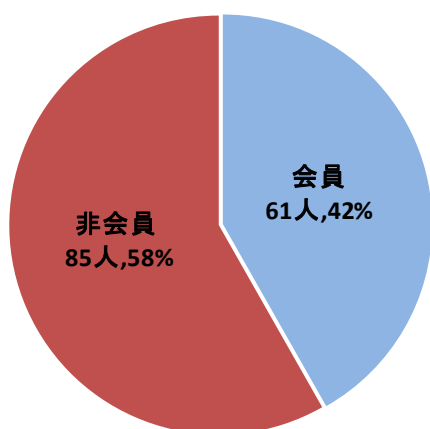
性別



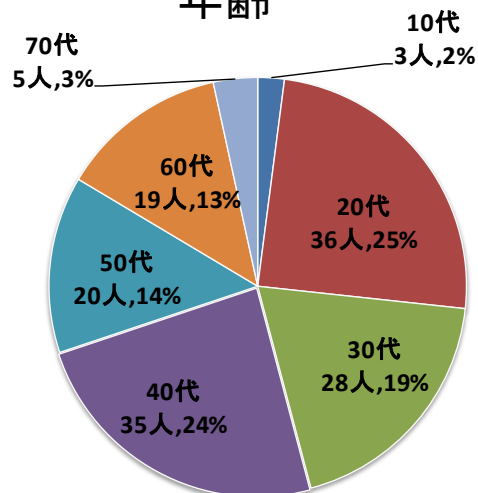
参加回数



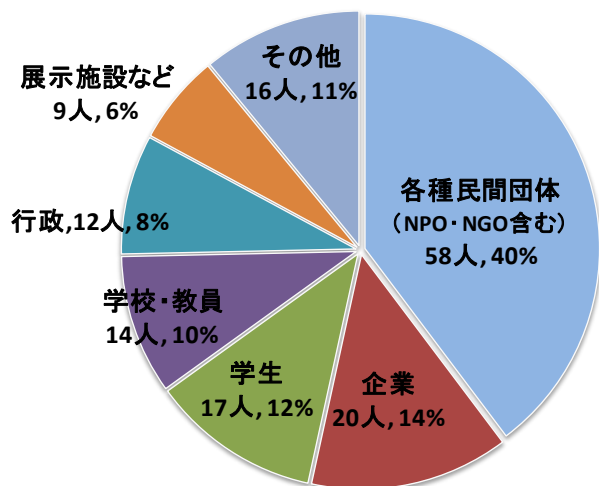
(公社)日本環境教育教育フォーラム 会員



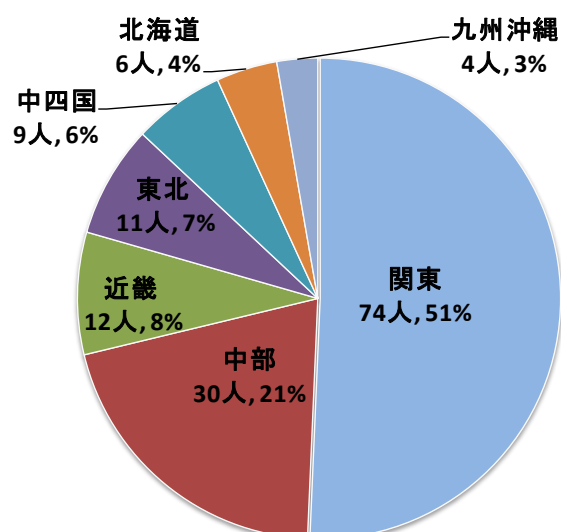
年齢



属性



地域



スタッフ・ボランティア

スタッフ名簿

川嶋 直	(公社) 日本環境教育フォーラム
加藤 超大	(公社) 日本環境教育フォーラム
鴨川 光	(公社) 日本環境教育フォーラム
京極 徹	(公社) 日本環境教育フォーラム
佐々木 恵子	(公社) 日本環境教育フォーラム
柴原 みどり	(公社) 日本環境教育フォーラム
瀬尾 隆史	(公社) 日本環境教育フォーラム
垂水 恵美子	(公社) 日本環境教育フォーラム
饗場 葉留果	(公財) キープ協会
大久保 哲	(公財) キープ協会
石川 昌稔	(公財) キープ協会
岡 明智	(公財) キープ協会
岡野 由美	(公財) キープ協会
小野 明子	(公財) キープ協会
川村 悦子	(公財) キープ協会
坂川 実基	(公財) キープ協会
齋藤 園子	(公財) キープ協会
佐藤 陽介	(公財) キープ協会
関根 健吾	(公財) キープ協会
高木 恭子	(公財) キープ協会
瀧上 舞	(公財) キープ協会
田村 のり子	(公財) キープ協会
鳥屋尾 健	(公財) キープ協会
西尾 有香音	(公財) キープ協会
増田 直広	(公財) キープ協会
村井 孝一	(公財) キープ協会
柳川 真澄	(公財) キープ協会
吉村 圭太	(公財) キープ協会

ボランティアスタッフ名簿

(五十音順)

伊東夏寿	駒澤大学仏教学部禅学科
江端聡	立教大学社会学部現代文化学科
大浦裕美子	聖心女子大学文学部英語英文学科
喜來大智	青森大学総合経営学部
杭田広人	関西学院大学教育学部
今田海斗	中央大学法学部政治学科
鈴木淳太	麻布大学生命環境科学部環境科学科
関根瑞希	麻布大学動物応用科学科
高安 智仁	都留文科大学文学部比較文化学科
田中嘉一	東京農業大学森林総合科学科
珠村 智	立教大学社会学部現代文化学科
新田美優	山梨大学生命環境学部環境科学科
檜垣圭輝	関西学院大学教育学部初等教育コース
村山かよこ	東京学芸大学教育学部
元安遥親	東京家政大学家政学部環境教育学科
米田有里	関西学院大学教育学部教育学科
米山功一	立教大学社会学部現代文化学科



清里ミーティング 2018 を支えてくれたボランティアスタッフの皆さん、
ありがとうございました！

清里ミーティングこれまでの実績

第1回清里フォーラム

- 日時：1987年9月28日(月)～29日(火)
- 参加人数：93人
- 主催：清里フォーラム実行委員会
- 【分科会】①環境教育について（考え方とその論理）
②自然観察の中に今後とこんでいきたいもの
③指導者とボランティアの養成を今後どうするか
④施設運営とコーディネーターの在り方について
⑤自然観察の有料化について
⑥清里フォーラムの将来性・方向性について
- ゲスト：加藤幸子（小池しぜんの子）

第2回清里環境教育フォーラム

- 日時：1988年11月13日(日)～15日(火)
- 参加人数：151人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／山梨県
- 【分科会】
前半 ①学校と環境教育 後半 ①地域・開発と環境教育
②地域社会と環境教育 ②施設と環境教育
③施設と環境教育 ③人づくりと環境教育
④自然観察と環境教育 ④市民・行政・企業・学校の協力
⑤企業と環境教育 ⑤環境教育の目的と方法
⑥学校と環境教育
⑦企業と環境教育
- ゲスト：ロバート・ピナウィーズ（元ヨセミテ国立公園管理事務所長）

第3回清里環境教育フォーラム

- 日時：1989年11月12日(日)～14日(火)
- 参加人数：168人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①小中高における環境教育カリキュラム
②若い世代に楽しいプログラムとは
③環境教育をうまく経営していくためには
④環境教育の場でボランティアが活躍できるためには
⑤環境教育で村おこしができるか
⑥大学における環境教育
- ゲスト：ジェームス・サノ（元マリン・ディスカバリーズ専務理事）

第4回清里環境教育フォーラム

- 日時：1990年11月18日(日)～20日(火)
- 参加人数：163人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①学校教育 ②事業化
③プログラム ④人づくり
⑤施設 ⑥地域開発・村おこし
- ※この年4月より上記6つの研究部会が発足。
- ゲスト：ジョセフ・コーネル（ネイチャーゲーム考案者）

第5回清里環境教育フォーラム

- 日時：1991年11月17日(日)～19日(火)
- 参加人数：187人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①学校 ②事業化 ③プログラム
④人づくり ⑤施設 ⑥地域社会
- ゲスト：スティーブン・モデル（ヨセミテ・アソシエーション会長）

- *1992年9月 任意団体 日本環境教育フォーラム発足
- *1992年7月 「日本型環境教育の提案」発刊

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '92(通算6回)

- 日時：1992年9月19日(土)～21日(月)
- 参加人数：132人
- 主催：日本環境教育フォーラム設立準備会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【紹介WS】①エコツアー報告・ヨセミテ自然学校
②New School of Conservationにおける環境教育
③ベンギンリザーブ活動報告
④国際理解教育・資料情報センター活動紹介
⑤フィールドミュージアムごっこ
⑥環境教育国際セミナーに参加して
⑦成城学園における「散歩」「遊び」
- 【体験WS】①さあ、みんなでやってみよう！開発教育シミュレーション
②エコロジーキャンプつまみぐいハイク
③ネイチャーゲーム入門
④もしフィールドでけがをしたら
⑤PLTプログラムの紹介
- 【分科会】①学校での環境教育
②地域に根ざした環境教育
③エコツーリズムの可能性とその問題点
④環境教育のプログラム教材開発
⑤指導者養成について
⑥エコマネジメントのしかた

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '93(通算7回)

- 日時：1993年11月14日(日)～16日(火)
- 参加人数：154人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【体験PRG】①ネイチャーゲーム ②死の準備教育の試み
③マインドクロッキー④パートナーシップへの挑戦
⑤究極の自然観察会 ⑥たずね鳥をさがせ
- 【分科会】①プログラム ②施設 ③学校
④人づくり ⑤企業 ⑥地域・自治体
⑦エコツーリズム ⑧海外の国立公園情報
- ゲスト：アン・ロベッタ（ストーリーテラー）

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '94(通算8回)

- 日時：1994年11月27日(日)～29日(火)
- 参加人数：167人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【体験PRG】①ネイチャーゲーム ②ファイブ・トリック
③森の宝箱をつくろう ④地球救出作戦
⑤枯れ木に花を咲かせましょう ⑥清里・冬物語
- 【分科会】①企業 ②エコツーリズム ③都市環境教育 ④ネイチャー
トレイル ⑤自然学校
⑥ネイチャーライティング ⑦フォーラム塾
- ゲスト：ジョン・エルダー（ミドルベリー大学英語学・環境学教授）

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '95(通算9回)

- 日時：1995年11月25日(土)～27日(月)
- 参加人数：185人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①自然学校としての施設づくり②行政・自然学校
③自然学校の経営を考える ④自然学校の人材育成
⑤自然学校のプログラム
- 【WS】①写真で環境教育 ②あなたにとって出会いとは何ですか
③環境教育を企画・プロデュースする
④ソフトクリーム姉ちゃんをねええ！
⑤未知なる可能性を求めて
⑥キープ・フォレスト・スクールのプログラム体験
⑦ネイチャーゲーム、アジアと環境教育
⑧独特な日本人に有効な環境教育戦略は？
⑨アース・アート ⑩メディアワークショップ

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '96(通算10回)

- 日時：1996年11月16日(土)～18日(月)
- 参加人数：174人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①自然学校の「事業化」
②自然学校でのプログラム
③地域振興と環境教育
④環境保全活動がそのまま環境教育
⑤エコツーリズムの様々な可能性
⑥JEEFの法人化など今後の可能性

- 【ワークショップ】
①ネイチャーゲーム入門講座
②ネイチャーエクスポアリング
③清里での川の環境教育を考える
④「子供であそぼう」についての御紹介
⑤元気がでる自然観察
⑥環境教育の本質を考える
⑦環境教育を企画・プロデュースする
⑧清里で「海の環境教育」を考えよう
⑨自然をテーマにしたスライドショー
⑩自分への気づきとNGO
⑪清里インターネット通信社へようこそ
⑫森だくさんの自然体験
⑬まちを遊ぼう
⑭未知なる可能性を求めて
⑮エコビレッジを作ろう
⑯アクティビティの「バクリとアレンジやローカライズ」

- ※1997年4月
環境庁主管の法人格を取得、社団法人日本環境教育フォーラム設立

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '97(通算11回)

- 日時：1997年11月15日(土)～17日(月)
- 参加人数：170人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①環境教育の指導者養成
②環境教育の新しいプログラム開発
③環境教育とまちづくり
④環境教育の情報の発掘と提供
⑤企業や行政とどのように組むのか？
⑥新しい交流集会のスタイル
- 【WS】①ネイチャーゲーム入門講座
②自然と心・心とひとのコミュニケーション
③環境教育の服装計画を考える
④出たとこ勝負の自然観察会+人間ウォッチング
⑤環境教育を企画プロデュースする

- ⑥環境教育と経営と税金
- ⑦インタープリティブサインをつくらう
- ⑧ディープエコロジー・ミニワークショップ
- ⑨フィリピン流！演劇ワークショップのすすめ
- ⑩安全管理チェックリストをつくってみよう
- ⑪ネイチャーエクスポアリングコースづくり
- ⑫水辺でさがすいろいろなつながり
- ⑬アクティビティと小道具
- ⑭キープの自然体験プログラム
- ⑮博物館をつくらう！
- ⑯野外における企業研修の実践とその可能性

【(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '98(通算 12 回)】

- 日時：1998 年 11 月 14 日(土)～16 日(月)
- 参加人数：176 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県
- 【分科会】
 - ①公共事業における環境教育の役割
 - ②森林・里山における環境教育と地域振興
 - ③アメリカの環境教育プログラムの日本への導入
 - ④動物と関わる環境教育
 - ⑤日本型エコツーリズムについて
 - ⑥メディアと環境、その先にあるもの
- 【ワークショップ】
 - ①環境教育個人商店を考える
 - ②私のきもち、みんなのきもち、地球のきもち
 - ③21 世紀のインタープリテーションを求めて
 - ④おきらく やまんの部屋
 - ⑤プロジェクトワイルド「水生生物」に学ぶ
 - ⑥エコマネーのすすめ
 - ⑦もし参加者が野外でケガをしたら
 - ⑧ネイチャーエクスポアリング
 - ⑨エコスピリチュアルワークの試み
 - ⑩アクティビティ大賞実施編・体験編
 - ⑪これまでの 50 年とこれからの 50 年
 - ⑫川を設計してみよう
 - ⑬「おもい」を「かたち」にはじめの一步
 - ⑭自然学校でめしが喰えるか

【(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '99(通算 13 回)】

- テーマ：「学ぶ心・育つ力」
- 日時：1999 年 11 月 13 日(土)～15 日(月)
- 参加人数：185 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県
- 【分科会】
 - ①自然学校の運営を考える
 - ②「総合的な学習の時間」で学校と地域をつなぐ
 - ③都市型の生活環境をテーマにした遊び場づくり
 - ④森から見つめる川と海
 - ⑤エコツーリズム一歩前へ
 - ⑥見つめよう地域の里山、伝えよう里山の魅力
 - ⑦チルデンを越えろ！
 - ⑧教育を考える
- 【早朝 WS】
 - ①カラスのきもち
 - ②朝のディーツァイム
 - ③きもちとキモチをつないだら
 - ④五感で感じよう清里の自然
 - ⑤オカリナ・ハナリナ体験教室

【(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2000(通算 14 回)】

- テーマ：「原点を見つめよう」
- 日時：2000 年 11 月 11 日 18 日(土)～20 日(月)
- 参加人数：171 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県
- 【体験 PRG】
 - ①野外での救急法を覚えよう
 - ②ネイチャーウォッチング in 清里
 - ③清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
 - ④心と体で感じよう！ネイチャーゲームが案内する清里の自然
 - ⑤竹を使ったものづくり
 - ⑥羊の毛から糸つむぎ教室
 - ⑦自分という自然に出会う
 - ⑧Frog (カエル)
 - ⑨プロジェクト・アドベンチャー
- 【分科会】
 - ①自然体験活動における体験学習法
 - ②ゆったり楽しむ ノスタルジーワーク
 - ③虫を知る・入門
 - ④「センス・オブ・ワンダー」って何だ？
 - ⑤学校ピオトープの可能性
 - ⑥五感を使って楽しみながら自然探検
 - ⑦環境教育とスピリチュアリティ
 - ⑧企業・行政マン向け環境教育テキスト作り
 - ⑨自然学校の PR 活動を考える
 - ⑩Out of Treasure Boxes
 - ⑪民話・ことわざから考える日本人と川の関係
 - ⑫エコツーリズムのビジネスネットワークを考える
 - ⑬表現を楽しもう！「シアターゲーム」
- 【早朝 WS】
 - ①野遊び手遊び発見隊
 - ②センス・オブ・ワンダーの体験

- ③地球と私の合作づくり “1 枚の葉”
- ④見て、聴いて、感じて・・・朝の森でネイチャーゲーム
- ⑤早朝ジョギングワークショップ
- ⑥キモチときもちをつないだら

- スライドプレゼンテーション
- JEEF 理事による 3 分トーク

【(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2001(通算 15 回)】

- 日時：2001 年 11 月 17 日(土)～19 日(月)
- 参加人数：192 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／農林水産省／林野庁／山梨県
- 【体験 PRG】
 - ①清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
 - ②初心者歓迎！清里の自然をネイチャーゲームで楽しもう
 - ③秋の味覚を楽しもう！
 - ④「ほっ♪」となるたき火講座
 - ⑤身体感覚講座
 - ⑥The Bear (ひぐまの生き方、暮らし方)
 - ⑦プロジェクト・アドベンチャー
 - ⑧やまねミュージアムへ行こう
- 【分科会】
 - ①総合的な学習の教材として「拾ったもの(生きもの)に関連するもの」を活用する
 - ②「いまどき」の子ども・「いまどき」の親 改造計画！
 - ③博覧会を環境教育という視点から評価する
 - ④ゆったり過ごすやまね流ネイチャーワーク
 - ⑤ワークショップという新しい学び方をめぐって
 - ⑥朝からイキナリ！若者で語ろう！の会
 - ⑦小さな子どものための環境教育の“技”をさぐる
 - ⑧地域の昔話を中心にした環境教育
 - ⑨農業と林業を語ろう！農業者と林業者と語る環境教育
 - ⑩Environmental Education in English
 - ⑪北九州博、きら博で行われた環境教育プログラムはこれだ！
 - ⑫テロ・戦争に関してわかしあう
 - ⑬環境教育基礎講座
 - ⑭GEMS の体験プログラム
 - ⑮自然学校で働くこと
 - ⑯センス・オブ・ワンダー
 - ⑰ネイチャーエクスポアリングライトの体験と総合的な学習の時間に活かせる活動事例
 - ⑱田んぼから生まれる日本型環境教育
- 【早朝 WS】
 - ①センス・オブ・ワンダーを楽しむ
 - ②早朝ジョギングワークショップ
 - スライドプレゼンテーション
 - 参加者による 3 分トーク「ここが変だよ！環境教育」

【(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2002(通算 16 回)】

- テーマ：「胎動」
- 日時：2002 年 11 月 16 日(土)～18 日(月)
- 参加人数：182 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／林野庁／山梨県
- 環境教育ミニレクチャー
- ヨハネスブルグ・サミット報告
- 参加者による 3 分トーク「環境教育 次のキーワードはこれ!!」
- 【ワークショップ】
 - ①地域通貨ってなんだろう？
 - ②折り紙を使った環境教育の試み(3)
 - ③幼稚園、保育園に環境教育を導入しよう
 - ④環境問題、エコロジカルアートからの試み
 - ⑤環境教育指導者と研究者、カリキュラム開発者のつながりを作ろう
 - ⑥体験主義を超えて・・・プロジェクト・ワイルドの世界
 - ⑦「自然の中で働く男性はオパチャン度が高い??」を証明したい!!
 - ⑧未来へ、世界へ、感動をどうつなぐのか
 - ⑨ひよこのキモチ
 - ⑩モアイは何を見たか
 - ⑪Environmental Education in English
 - ⑫持続可能な開発と環境教育
 - ⑬森の交響サイン計画づくり
 - ⑭サロンの語り場
- 【早朝 WS】
 - ①早朝ジョギングワークショップ
 - ②清里ミニガイドツアーA
 - ③清里ミニガイドツアーB
 - ④モンゴル茶で朝を迎えよう
 - ⑤清里ミニガイドツアーC
- スライドプレゼンテーション

【(社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2003(通算 17 回)】

- キーワード：持続可能な開発のための教育
- 日時：2003 年 11 月 15 日(土)～17 日(月)
- 参加人数：208 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／林野庁／山梨県
- 【全体会】
 - ・科学と環境教育をつなぐミーティング（前夜祭）の報告
 - ・環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律

- ・持続可能な開発のための教育（ESD）
- ・スライド&トーク　ーオローニの日々ー

【WS&体験 PRG】

- ①ワラっていいとも
- ②社会教育ゲーム体験プログラム　投資意志決定ゲーム Chemical
- ③参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試み/AM
- ④総合学習への NPO 参画が期待されているけど、実現が難しいのは何故？
- ⑤エコ・ネイションゲーム
- ⑥忙しい!!!　けど前向きに　レベルアップシートを作ろう
- ⑦科学するココロを育てよう！
- ⑧参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試み/PM
- ⑨野生生物教育の現状と課題
- ⑩フォーラム企業部会をリセットして、今後の方向性を考えよう！
- ⑪「持続可能な人」づくり
- ⑫開府 400 年！　江戸町民の循環型社会から学ぶごみ減量大作戦
- ⑬どうなる？どうする？　日本環境教育フォーラムの未来
- ⑭子育てという環境
- ⑮地方発！食農発信！
- ⑯環境教育の中の行政の役割を考えよう！

【早朝 WS】

- ①センス・オブ・ワンダー
- ②清里ミニガイドツアー　富士山とせせらぎの小径コース
- ③清里ミニガイドツアー　ぬしの木コース
- スライドプレゼンテーション

【社】日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2004(通算 18 回)

- キーワード：「持続可能な開発のための教育の 10 年」夜明け前
- 日時：2004 年 11 月 13 日(土)～15 日(月)
- 参加人数：187 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／林野庁／山梨県
- 【全体会】
 - ・「持続可能な開発のための教育の 10 年」夜明け前
 - ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」を考える

【WS&体験 PRG】

- ①エコツーリズムという生き方
- ②科学と環境教育
- ③地場産小麦でパンをつくらう！
- ④環境立国　エコ・ネイションゲーム
- ⑤「センス・オブ・ワンダーからグリーンコンシューマーへ」
～第 1 回清里「エコ商品コンテスト」～
- ⑥持続可能な地域づくりにつながるネイチャーゲーム体験
- ⑦体験学習への扉をひらく(午前の部)
- ⑧自然学校の動きと人材養成
- ⑨環境教育 in 国際協力　最前線！
- ⑩環境教育基礎講座「環境教育と自然体験」
- ⑪酵母を育てて、パンを作ろう！
～酵母が教えてくれる、命、自然とのつながり～
- ⑫石器時代に接近！モノはこうして作る　～シエラカップ～
- ⑬いのちを伝える自然体験
～自分流健康な生きかたを学ぶ～
- ⑭ボードゲーム型の環境教育プログラム
- ⑮体験学習への扉をひらく(午後の部)
- ⑯「1 億円のプロデュース」

【特別ワークショップ】

- バーム油のはなし　～開発教育入門講座～

【早朝 WS】

- ①早朝ジョギングワークショップ
- ②センス・オブ・ワンダーって、こんなに楽しく気持ちいい
- ③清里ミニガイドツアー　ぬしの木コース
- スライドプレゼンテーション・5 分で伝えるメッセージスライド
- JEEF 公開理事対談

【社】日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2005(通算 19 回)

- キーワード：「自然を舞台にした環境教育は、持続可能な社会作りに具体的にどのよう役に立ってきたのか」
- 日時：2005 年 11 月 19 日(土)～21 日(月)
- 参加人数：221 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／経済産業省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会：基調講演、5 分間スピーチ、パネルディスカッション
- 【WS&体験 PRG】
- ①環境教育基礎講座(午前の部)
- ②自然学校って何だ？
- ③学校教育と環境教育
- ④ボードゲーム型の環境教育プログラム
- ⑤ひとりひとりの感性で自然を感じよう
～ネイチャーゲームでのんびりぶらぶら～
- ⑥セルフガイドシートを使用した、短時間、多人数対象プログラムの検証　～セルフガイドシートの評価軸を作ろう～
- ⑦科学ってなんだろうと考えながら皆で遊ぼう！
～低学年向けの GEMS プログラムを通して～
- ⑧森林療法
- ⑨プロジェクト WE T 体験会(午前の部)
- ⑩環境教育基礎講座(午後の部)
- ⑪自然学校の評価に向けた人材養成
- ⑫小さな町村での自然学校の役割と可能性を探る
- ⑬CSR と環境教育
- ⑭おいしく食べ続けていける社会づくりは……
- ⑮里山で音楽会

- ⑯樹木年輪から樹の声を聴く方法！　～過去からの環境の変化を迎える～
- ⑰プロジェクト WE T 体験会(午後の部)
- ⑱科学と環境教育　見直そう！あなたのインタープリテーション
～持続可能な社会づくりに自然科学知を活かすために～

- 【早朝 WS】　①早朝ジョギングワークショップ
- ②座禅&ヨガ
- ③清里ミニガイドツアー

- スライドプレゼンテーション・5 分で伝えるメッセージスライド
- JEEF 活動報告

【社】日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2006(通算 20 回)

- 日時：2006 年 11 月 18 日(土)～20 日(月)
- 参加人数：224 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／経済産業省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会「日本の環境教育　この 20 年を振り返る」基調講演
- 学長鼎談「大学と環境教育」
- 【WS&体験 PRG】

- ①自然学校を事業化する
～20 年間に自然学校は何を獲得したのか～
 - ②団体・組織におけるリスクマネジメントを考える
 - ③あなたにとって食育ってなに？
 - ④環境教育基礎講座
 - ⑤新型の起業研修を応用したスタッフ研修ゲーム
 - ⑥学びとコミュニケーション
～GEMS プログラムの体験を通して～
 - ⑦ESD の実践のポイントを探る
～みんなで話せばわかってくる!?～
 - ⑧森林環境教育のすすめ　～木が好きになるプログラム～
 - ⑨50 分プレゼンテーション(午前の部)
 - ⑩企業と NPO との協働を考える戦略会議
 - ⑪環境教育と ESD(持続可能な開発のための教育)の関係性を探る
 - ⑫環境教育と地域づくり
 - ⑬環境教育仕事塾
 - ⑭行政との連携を考える
 - ⑮太鼓で太古に退行するぞ！
 - ⑯木から樹を知る方法　～木材を IP にいかす～
 - ⑰セルフガイドで使えるしかけ展示のモデルをつくらう
 - ⑱50 分プレゼンテーション(午後の部)
 - ⑲自然への感動を生み出し、ライフスタイルの転換を促す
科学的知識の伝え方
 - ⑳感性？科学？どっちのインタープリテーションショー
- 【早朝 WS】　①早朝ジョギングワークショップ
 - ②環境質問　～答えのない問題～
 - ③ロシアからやってきた冬鳥を探してみませんか
 - ④清里ミニガイドツアー
 - ⑤清泉寮　朝さんば

- 環境ショート映像作品上映会

- 今後の戦略会議

- スライドプレゼンテーション

【社】日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2007(通算 21 回)

- 日時：2007 年 11 月 17 日(土)～19 日(月)
- 参加人数：230 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／経済産業省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 省庁プレゼンテーション
- 全体会：「生物多様性」基調講演
・第 3 次生物多様性国家戦略が目指すもの
・企業が取り組む生物多様性保全

【ワークショップ】

- ①「生物多様性」の見つけ方・伝え方
～自然体験活動を、生物多様性保護の教育活動に結びつける実際の方法～
 - ②行政との協働を考える
 - ③学ぶ環境としてのコミュニケーション　～GEMS とゴードンメソッド～
 - ④食育コミュニティをつくらう！
 - ⑤どこでもインタープリテーション！　～グッズ展開型 IP～
 - ⑥関西発！これからは日本的でいいこう！
 - ⑦新型の企業研修を応用したスタッフ研修ゲーム
スピード・ソリューション～自然学校版～
 - ⑧企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
 - ⑨ツリークライミング？　樹上の世界から学ぶこと
 - ⑩50 分プレゼンテーション
 - ⑪企業と環境 NPO との協働を進める戦略会議
 - ⑫ESD を広める人のための「ESD 入門講座」
 - ⑬環境教育基礎講座
 - ⑭生物多様性と環境教育について
 - ⑮科学と環境教育　自然体験からライフスタイルの転換へ
～ヤマネのプログラム体験を通じて～
 - ⑯メディアと自然学校
 - ⑰環境経営戦略ゲーム体験会
 - ⑱体験型展示物を評価しよう
 - ⑲エコツーリスト予備軍を探せ・つかめ・そして楽しめ！
 - ⑳障害者と共に楽しみ・学ぶ森林環境教育
 - ㉑やってみよう!! 体感ツリークライミング㉒の世界
- 【早朝 WS】　①早朝ジョギングワークショップ
 - ②センス・オブ・ワンダーを楽しむ散歩
 - ③清里ミニガイドツアー

- 今が旬の活動事例紹介
- スライドプレゼンテーション
- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2008(通算 22 回)

- 日時：2008 年 11 月 15 日(土)～17 日(月)
- 参加人数：192 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／経済産業省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会：「日本型環境教育の知恵 出版記念」
～日本型環境教育とは～
- 【ワークショップ】
 - ①科学と環境教育 ヤマネに学ぶエコロジカルな暮らし方
 - ②生き物との共生について ～どんな共生があるのか～
 - ③環境教育&ESD を” 広げる×深める” 政策を考えよう
 - ④お互いの関係を作るコミュニケーションスキル
 - ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ！
 - ⑥エコとエネをつなぐ環境教育を考える
 - ⑦森林環境教育と Project Learning Tree
 - ⑧環境教育を評価する「環境教育を棚卸しましょう」
 - ⑨企業・NPO・学校の連携による環境教育を考える
 - ⑩企業のための環境 NPO カタログ編集会議
 - ⑪どうする!《限界集落》またの名は《上流社会》
 - ⑫科学と環境教育総集編 科学と環境教育の関わりを定義する
 - ⑬オオバコずもうで勝つ方法！理学系研究室の自然体験
 - ⑭川遊びのルールを広めよう
 - ⑮日本型、日本的を考える ～日本の自然観という視点～
 - ⑯地球環境カードゲーム マイアースを遊び尽くす
 - ⑰障害者と共につむぐ環境教育の企画をつくる！
 - ⑱森づくりのための戦略会議 ～行政・企業・NPO の協働～

【早朝 WS】

- ①砂鉄から鉄を作ろう！ 柏崎の製鉄遺跡と自然のかかわり
- ②映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
- ③清里の森で宝物発見
- ④ロシアから渡ってきた鳥と出会いましょう
- ⑤清里ミニガイドツアー

- 環境教育プレゼンテーション
- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2009(通算 23 回)

- テーマ：「生物多様性」～環境教育の役割～
- 日時：2009 年 11 月 14 日(土)～16 日(月)
- 参加人数：193 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／経済産業省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会
 - ・基調講演「生物多様性」とは何か？ 行政・企業・NGO から」
 - ・事例紹介「生物多様性 私はいこう伝える」
 - ・全体ディスカッション

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育基礎講座
 - ②多様な生物の声を聴く～全生命の集いワークショップ～
 - ③科学的な視点を活かした環境教育のプログラム作り
 - ④企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
 - ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ！Part2
 - ⑥風が吹けば桶屋が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
 - ⑦バーマカルチャーと環境教育
 - ⑧幼児～小 2 に伝える生物多様性～生物多様性の形を探る～
 - ⑨ビジターセンターを運営側から考え創る方法
 - ⑩あなたにとって、生物多様性って何？
 - ⑪生物多様性に焦点を当てたプロジェクト・ワイルド体験
 - ⑫人間界に多様性は確保されているか
 - ⑬日本の森林環境教育と Project Learning Tree
 - ⑭どうプログラム化しよう？自然学校の「エネルギー」
 - ⑮風が吹けば桶屋が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
 - ⑯日本的、アジア的自然観を整理し、環境教育に活かす
 - ⑰エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part2
 - ⑱事故防止～注意を促すだけでいいの？実践的予防安全法
 - ⑳トランジションタウンとは何か？都留での試み
- (注) ⑦川遊びを始めよう！～川の安全管理トレーニング～ は、都合により中止

【早朝 WS】

- ①生物多様性を映像で感じよう ～いっしょに生きる道～
- ②映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
- ③ゼロからの火おこし術

- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

※2010 年 6 月 公益社団法人への移行認定を取得、
公益社団法人日本環境教育フォーラムへ。

(公社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2010(通算 24 回)

- テーマ：「いのちをつなぐ環境教育」
- 日時：2010 年 11 月 13 日(土)～15 日(月)
- 参加人数：177 人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／経済産業省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会
 - ・基調講演「生物多様性条約第 10 回締約国会議の結果」
 - ・提案「生物多様性保全に果たす ESD の取組について」
 - ・提案「What is CEPA?」
 - ・取組紹介「環境省における ESD の取組について」
 - ・全体ディスカッション

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育基礎講座 ※
- ②日本の自然観から考える環境教育
- ③農的暮らしの学校
- ④自然感を耕す：人は心を、畑は土を、森はデザイン感を
- ⑤生物多様性まんだらカードゲーム体験会
- ⑥生物多様性条約の CEPA って何だ？
- ⑦企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑧エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part3
- ⑨「サステナビリティ」の基本はこれだ！ ※
- ⑩これだけは知っておきたい！生物多様性の基礎知識 ※
- ⑪生物多様性を普及する環境教育を目指して
- ⑫森を考える～木質バイオマスで 100 年先の森づくり～
- ⑬大学生のための食育プログラム
- ⑭命をいただく～ニワトリと生きる～
- ⑮エコロジカル・シンキングゲーム
- ⑯「地球交響曲第 7 番」を見て、みんなで語ろう！
- ⑰イナカとこどもと日本の未来を考える
- ⑱企業の行なう自然体験活動と地域のつながりを考える

※の印は、主催者企画ワークショップ

(注) ⑨海外での環境教育(保全)活動を日本でどう伝えていくかは、都合により中止

【早朝 WS】

- ①バードコールハイク
- ②多様性を感じる観察会
- ③ゼロからの火おこし術
- ④朝飯前の手仕事
- ⑤朝日をあびつつ、ミルクティー飲んでごあいさつ
- ⑥生き方を学ぶ自然観察
- ⑦ノルディックウォークで早朝散歩
- ⑧映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
- ⑨みみをすませば～みんなでつくるいのちのものがたり～

■環境教育プレゼンテーション

- 当日募集ワークショップ
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(公社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2011(通算 25 回)

- テーマ：「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」
- 日時：2011 年 11 月 19 日(土)～21 日(月)
- 参加人数：188 人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／林野庁／経済産業省／山梨県／日本環境教育学会

■全体会 1

- ・パネルディスカッション
- 「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育基礎講座 ※
- ②企業・NPO・学校連携の環境教育を考える VOL.2
- ③質的データ分析(QDA)という手法を学ぶ
- ④農的暮らしの自然学校
- ⑤森林療法にできること～森林セルフケアの可能性
- ⑥里山応援ネットワークを作ろう！ワークショップ
- ⑦0 から仕事を作る～体験からチームを作る～
- ⑧『ワールドカフェ～自分発！未来をかける価値観考～』
- ⑨修験道×環境教育～音色と歩き、体で精神性を感じる～
- ⑩震災救援組織(RQ 市民災害救援センター)の作り方 ※
- ⑪ESD×CSR：サステナビリティ教育指針を体感！ ※
- ⑫やったらできた！エネルギー系企業と弱小 NPO のコラボ
- ⑬環境と文化・歴史・科学 etc.の複合…「旧暦」入門
- ⑭自然感を耕す 自分と里地里山里水が元気になるワーク
- ⑮生物多様性まんだらカードゲーム 今年は小学生版
- ⑯PLT, WILD, WET の日本での可能性を考えよう
- ⑰日本的、アジア的自然観を整理し、環境教育に活かす
- ⑱原発と環境教育～思ったことを話すことからはじめよう～
- ⑲狩猟×環境教育～森と野生動物と人のつきあい方～

※の印は主催者企画ワークショップ

【早朝 WS】

- ①ゼロから始める火起こし術
- ②森林療法のプログラム体験～樹林気功と運動療法
- ③冬鳥と出会って、いのちを感じる
- ④キープ協会「アニマルバスウェイ」見学ツアー

- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2012(通算 26 回)】

- テーマ：
「アジアの一員として、日本が今できること
～think global actlocal:『リオ+20』の年に考える～」
- 日時：2012年11月17日(土)～19日(月)
- 参加人数：177人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会
「アジアの一員として、日本が今できること
～think global actlocal:『リオ+20』の年に考える～」
 - ・基調講演「リオ+20の概要と、NGOの成果と課題」
 - ・パネルディスカッション
- 「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」
- 【ワークショップ】
 - ①自然体験型環境教育入門講座
 - ②自然学校人事担当養成講座～ほしい人材を育てよう～
 - ③実施無し
 - ④ブーさんの森をデザインしよう！
 - ⑤考えよう！伝えよう！森の”いのち”の知恵と力
 - ⑥食から考える価値と暮らし
 - ⑦ねん土をつかって、超ミニアースオープンをつくろう！
 - ⑧農村と若者～そと者、若者による農山村の活性化～
 - ⑨一次産業と社会貢献事業～金の切れ目が本気のはじまり
 - ⑩「住み開き」を考えよう～身近に環境教育の場をつくる～
 - ⑪「都市と自然の融合～両方見て、初めて見える環境教育！～」
 - ⑫木質バイオマスを首相官邸へ～さらなる普及をめざして～①
 - ⑬地域に根ざすということについて PBE への招待
 - ⑭田舎で生きる！ライフモデル作りワークショップ
 - ⑮バタゴニアから学ぶ！持続可能な働き方と歩み方
 - ⑯環境教育×植物療法～自然の恵みをヒトの力に～
 - ⑰都市型環境教育 小学生向け紫外線プログラム体験
 - ⑱文学から見た農的暮らしの可能性
 - ⑲理想のシゴト？自然学校職員の本音と未来像
 - ⑳身近な環境の総合的“明察”…内なる「マイ暦」を作ろう！
 - ㉑農が X を助け、X が農を助ける～半農半 NPO でいこう～
 - ㉒エコとエネのつながりを考えるカードゲームワークショップ
 - ㉓森で教える国語・算数・理科・社会をつくっちゃおう！
 - ㉔木質バイオマスを首相官邸へ～さらなる普及へ向けて～②
- 【早朝 WS】
 - ①科学と環境教育プログラム「静岡のなりたち」
 - ②みどりとともにだに！泥んこ遊び de 苦玉作り
 - ③キープ協会「アニマルバスウェイ」見学ツアー
- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2013(通算 27 回)】

- 日時：2013年11月16日(土)～18日(月)
- 参加人数：204人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／経済産業省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会
 - ・キーノートスピーチ
 - ・ワールドカフェ方式ディスカッション
 - ・「環境教育に関わる諸団体から最新のメッセージを聞く」
- 【ワークショップ】
 - ①自分の仕事を創る技術～IPの新しい可能性を考える～
 - ②地域に根ざした環境教育 Place-Based-Education
 - ③モミでご飯をたこう！～空き缶で「ミニかまど」づくり～
 - ④宇宙船地球号体感インプリ：20世紀天文少年の誘い
 - ⑤環境教育をカードゲームで考えてみよう～エネルギー編
 - ⑥「原発事故のはなし3」デモとディスカッション
 - ⑦質的データ分析(QDA)を体験してみよう
 - ⑧企業と NGO の幸せな関係をながく続ける秘訣
 - ⑨楽器を使ったプレゼンテーションを考えよう
 - ⑩知っておきたい基礎知識～命・自然・地球・宇宙～
 - ⑪日常の現場や暮らしに持ち帰る“運営と振り返り”
 - ⑫持続可能な地域のための必要なくみを考えよう
 - ⑬継承したい日本の自然観～自然体という生き方～
 - ⑭事例から学ぶ ESD(持続発展教育)の基本と実践
 - ⑮ゲームで生態系を学ぼう！
 - ⑯ウィルダネスファーストエイド～仲間を守るその技術～
 - ⑰パフォーマンス評価の世界の潮流
 - ⑱15年のノウハウ伝授！身近な素材でプログラムづくり
 - ⑲小学校で環境教育やりたい人 集まれ！
 - ⑳伝える技術 KP 法(紙芝居プレゼンテーション法)
- 【早朝 WS】
 - ①アイソン慧星いつ観るか…清里、澄んだ空…今でしょ！
 - ②ロシアからの旅人に会おう
 - ③清里トレラン
- 【特別企画】
 - ・アクアマリンふくしま移動水族館
- 【自主企画】
 - ・プレゼンテーションで世界を変えよう！～TEDの世界～
 - ・野外フェスは環境教育のツールになりえるか！？
 - ・スマホ、テレビゲームの年齢制限でも考えてみよう
 - ・JEEF 理事バンド(バンド演奏)
- 10分プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2014(通算 28 回)】

- テーマ：「ESD の 10 年後の環境教育」
- 日時：2014年11月15日(土)～17日(月)
- 参加人数：186人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会
 - ・キーノートスピーチ
 - ・基調報告 テーマ【ESD ユネスコ世界会議を終えて】
 - ・ワールドカフェ方式ディスカッション 【私と ESD】
- 【ワークショップ】
 - ①自然の中で遊ぶゲーム
 - ②再び、地域に根ざした環境教育(PBE)について
 - ③企業のESDのあり姿/あるべき姿を考えよう
 - ④「協働」による里山再生の取り組み～〇〇×〇〇～
 - ⑤エネルギー大臣になろう～ゲームで考える環境教育～
 - ⑥ウィルダネスファーストエイド～仲間を守るその技術
 - ⑦楽器を使ってプレゼンテーションしよう
 - ⑧語ろう！考えよう！「企業のESD宣言」
 - ⑨電子絵本を活用したESDプログラムを考える
 - ⑩国連の新目標(SDGs)は環境教育普及につながる？
 - ⑪体感、出航！宇宙船地球丸「苦手は天文」ぶっ飛ばせ
 - ⑫「自然学校と林業」環境教育は暮らし生業に直結せよ！
 - ⑬イノベーション創発型ワークショップのデザインを学ぶ
 - ⑭清泉寮で自然音楽野外フェスティバルをつくる
 - ⑮教育と刃物～ナイフを使う喜びを子どもたちに！
 - ⑯シニア自然大学を作ろう
 - ⑰自己肯定感を育むESD～これからの学びへの提案～
 - ⑱GEMSの新しい使い方～森の中で 図書館の片隅で～
 - ⑲KP法(紙芝居プレゼンテーション法)の工夫共有ワークショップ
 - ⑳小学校で環境教育をやろう！PartII
- 【早朝 WS】
 - ①朝の楽しい修行：ヨガと勤行
 - ②環境教育と持続可能な開発の日米比較研究中間報告②
 - ③エンカウンターグループ「今ここ」
 - ④清里朝散歩
- 10分プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2015(通算 29 回)】

- テーマ：「地域をつくる環境教育」
- 日時：2015年11月14日(土)～16日(月)
- 参加人数：174人
- 主催事務局：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 現地開催事務局：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 特別協力：環境省グッドライフアワード
- 全体会
 - ・キーノートスピーチ「農的生活学校の学び方」
 - ・ワールドカフェ方式ディスカッション「地域をつなぐ環境教育」
 - ・「世代を超えて一緒に〇〇おう！」
- 【ワークショップ】
 - ①広範囲に拡散した外来種の市民による調査と駆除対策
 - ②獣害問題は、環境教育の対象になるのか。
 - ③エネルギー大臣になろう！～ゲームで考える環境教育～
 - ④ご当地 GEMS～地域に根差したアクティブ・ラーニング～
 - ⑤自然学校の 30 年を振り返りこれからの 20 年を考える
 - ⑥環境教育の基礎…自然とは？命とは？
 - ⑦「PBE：地域に根ざした学び」を考える
 - ⑧「若者が地域で生きる・暮らす」を考える 3 時間
 - ⑨里山ってなんだらう～その意味、価値を考える～
 - ⑩野生生物と共生する環境地域づくりの進め方
 - ⑪持続可能な未来のための科学技術とのつきあい方
 - ⑫サステイナブル・ツーリズム国際基準を自然学校に！
 - ⑬体感、出航！宇宙船地球丸。「天文は苦手」吹っ飛ばせ
 - ⑭探そう磨こう！環境教育の魅力を伝えるコトバ
 - ⑮野外フェスに環境教育を広げる『NATCU FES』
 - ⑯地域が蘇る“森林資源を循環させる経済”を考える
 - ⑰廃校利用の自然学校の経営
 - ⑱ビギナーのための自然体験型環境教育プログラム
- 【早朝 WS】
 - ①朝の楽しい修行：ヨガと瞑想と歌
 - ②手づくりのもみ殻コンロ、ペール缶めくくどの実演！
 - ③ロシアからの旅人と再会しよう～冬鳥との出会いを求めて～
 - ④清里朝散歩
- 10分プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2016(通算 30 回)】

- テーマ：「環境教育の未来を考える！あなたの次の一歩は？」
- 日時：2016年11月5日(土)～7日(月)
- 参加人数：196人
- 主催事務局：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 現地開催事務局：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会
 - ・スライドショー「これまでの環境教育をふりかえる」
 - ・パネルディスカッション「日中韩スウェーデンの環境教育比較研究」

・全員参加型ディスカッション

【ワークショップ】

- ①持続可能な社会づくり、企業の役割とは
- ②持続可能な暮らしの日常を体験する「いつもの暮らし」
- ③『エディブル・スクールヤード』をはじめよう！
- ④環境教育業界×私たち、若手の関わり方
- ⑤祝 30 周年☆清里 ミーティングにまつわるコピーを作る
- ⑥自然をフィールドとした父親参加型のわんぱく子育て
- ⑦エネルギー大臣になろうワークショップ
- ⑧清里 ミーティング「30+30」
- ⑨森の中でサイエンス～動物たちの生きる知恵
- ⑩“環境”＝“地球”を感じてみよう！天文のイロハ for 環境教育
- ⑪CEPA って何の略？地域をつくる湿地教育を考える
- ⑫森が薫る燻製づくり
- ⑬一流を学ぶ・・・第一印象と名刺交換
- ⑭「水の足跡」ースペース・ウォークを使ってー
- ⑮環境・CSR 活動評価チェックリストを使ってみよう
- ⑯海の森からの贈り物～海藻おしば～
- ⑰告知・広報に活かす” 伝わる”、” 伝える” 文章講座
- ⑱環境教育と家族
- ⑲アクティビティを再生する
- ⑳野外での事故に備えよう！「野外・災害救急法」の体験
- ㉑ いま「公害教育」を考える
- ㉒ 「いつもの暮らし」を環境教育プログラムに！
- ㉓ 「自然から学ぶ場と人の全国フォーラム」中間検討会
- ㉔ SDGs でつなげる地域と活動ワークショップ
- ㉕ 銀粘土で作る リーフモチーフの純銀アクセサリー
- ㉖ 幻想は捨てよう！NPO と行政のミズを埋める 8 0 分
- ㉗ 火を囲み、みんなで作る「居場所」づくり
- ㉘ マジックで環境教育に活用する
- ㉙ 抜けよう！特定外来生物駆除活動の輪！
- ㉚ 持続可能な未来のための科学技術とのつきあい方 2

【早朝ワークショップ】

- ① ヨーガと瞑想
- ② 甲虫の玉虫でアクセサリーを制作してみよう
- ③ 冬鳥と出会い、地球を感じよう
- ④ 清里朝散歩

■10 分プレゼンテーション

■ポスターセッション

■当日募集ワークショップ

■人と組織の紹介処

（公社）日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2017(通算 31 回)

■テーマ：「組織・活動を変革する 17 の視点 ～SDGs でつくる私のアクション～」

■日時：2017 年 11 月 18 日(土)～20 日(月)

■参加人数：137 人

■主催事務局：公益社団法人日本環境教育フォーラム

■現地開催事務局：公益財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省、文部科学省、林野庁、山梨県、日本環境教育学会、
持続可能な開発のための教育推進会議

■全体会

- ・パネルディスカッション「SDGs に向けて教育は何ができるか」
- ・自分×SDGs で次のアクションを考える
- ・全員参加型ディスカッション～SDGs でつくる私のアクション～

■ワークショップ

【対話型ワークショップ】

- ① フライング・ワイルドの体験と SDGs との繋がり
- ② S D G s ×わたし
- ③ 協同学習の手法で環境教育をスキルアップしよう！
- ④ 環境思想を考える
- ⑤ 生きものの魅力で心を動かしたい
- ⑥ 森林療法×環境教育～癒しが持つ SDGs への可能性
- ⑦ つなげよう！自然体験型エコツアーと SDGs
- ⑧ CSR プログラム事例で学ぶ社会的インパクト評価
- ⑨ パートナリシップでつくる「キョサト」SDGs 企画
- ⑩ 環境教育研究&実践から考える SDGs

【体験型 (E)・フレッシュバーソンズ (F) ワークショップ】

- ⑪ 持続可能な「ミライ」をつくる人材育成の在り方：F
- ⑫ 森林療法～調和する自己の持続可能性：F
- ⑬ 中止：野外活動を 120%楽しくする図鑑の読み方・使い方：F
- ⑭ 火を囲み、みんなで作る「居場所」づくり：E
- ⑮ KP 法で SDGs を整理してみよう：E
- ⑯ 17 の SDGs で柔軟な頭を作るゲームを：E
- ⑰ アナログゲームで環境を学ぼう！：E
- ⑱ 「教える」より「学びあう場」を創ろう！：E
- ⑲ 中止：自然を使った深く自分と繋がる体験ワークショップ：F
- ⑳ 「うんこ」から自然を見る ～教材化の面白さと可能性：F
- ㉑ 中止：環境ポータルサイト「B L U E S H I P」の活用方法：F
- ㉒ 自然をフィールドとした父親参加型のわんぱく子育て：E
- ㉓ 既存のプログラムを SDGs ナイズ大作戦！GEMS 編：E
- ㉔ SDGs と森里川海、そしてライフスタイル：E
- ㉕ 目からウロコ、環境教育のためのミニマム天文基礎講座：E
- ㉖ 公害と SDGs JEEF・あおぞら財団の協働 FW：E
- ㉗ 一体感を生み出す魔法の技術！アイスブレイク三連発♪：E
- ㉘ 音楽フェス×環境教育@清里 超実践体感ワークショップ

【早朝ワークショップ】

- ① 森林療法プログラム体験～樹林気功とグラウンディング
- ② ヨーガと瞑想
- ③ 甲虫の玉虫でアクセサリーを製作してみよう
- ④ マインドフルな自然体験
- ⑤ 冬鳥と出会い、地球を感じよう

■ポスターセッション

■当日募集ワークショップ

■人と組織の紹介処

清里ミーティング 2018 報告書

発行者：公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）

〒116-0013

東京都荒川区西日暮里 5-38-5 日能研ビル 1 階

TEL：03-5834-2897 FAX：03-5834-2898

URL：<http://www.jeef.or.jp/>